大正八年十月四日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）大正八年十月七日發行第三卷第一號（大正八年十月三日印刷納本）

近代思想

復活號

近代思想社

東京市小石川區武嶋町二四

十月の三越

十月一日より

御大典模型陳列

聖代大典の盛儀を傳へんが爲め、五ケ月の日子を費して謹製せる紫宸殿及大嘗祭の御儀式の十分の一模型成る。精巧無比、親しく其實況を拜するの感あり。御來觀を待つ。

新柄陳列會

寄切見切反物賣出し

美術展覽會

懸賞寫眞『稼ぎ』陳列

十月十三日より

二科會美術展覽會

東京 三越呉服店

燈下必讀の新刊書

新刊

慶大教授 堀江博士序論

慶大政治學士 土屋興著

英國勞働不安

□四六判布裝・三三四頁□　□定價一圓・郵稅八錢□

本書は世界の耳目を聳動したる最近の英國勞働不安に關し著者が滯英中實地に見聞し研究せる所を發表せるものにして最近五ケ年間に起れる同盟罷業は大小となく網羅論評せり我國に於ても近年資本對勞役の關係漸く險惡ならんとし勞働者待遇資本勞役の調和等の問題は今や漸く社會の輿論を喚起しつゝあり此等の問題に明快の回答を示すもの即ち本書にして學者政治家實業家を始めとし苟も國家の前途を憂へ本邦產業の發達を期せんとするものゝ必ず再讀三讀すべき良著なり

新刊

慶大教授 三邊金藏 同上 小泉信三 共譯

戰爭是非

□四六判美裝・一三〇頁□　□定價卅五錢・郵稅六錢□

▼原書、「戰爭と之より脫するの道」

▼著者英國劍橋大學ディッキンソン氏 ＝ 譯者の批評序文各一篇宛を添ふ

著者曰く歐羅巴に於ける過去幾世紀の諸戰爭と等しく今度の戰爭も亦人民の欲求と利益を無視した諸國の政府に於て起されたものであるとは本書の成る一篇の主意で最後に著者は英佛露獨の何れにも偏せざる公平の見地に立つて平和締結の方法を述べて居る

東京神田表神保町 東京堂發賣　慶應出版局發行

農業實習講義

附録 中學講義

秋期新學期開始

會員大募集

特長

- 内容完備して而も學費最も低廉
- 新しき實用的學科を悉く講述す
- 専門學と普通學を同時に教授す
- 勉學上便益ある設備特典完全す
- 青少年實業雜誌快國民を進呈す

■見本■

ハガキにて申込次第進呈

東京神田錦町三ノ九

國民實科大學院

振替東京二九八二九番

商業實習講義

附録 中學講義

各編拾錢 現代百科文庫 内容豐富

新宗教の暗示 宗教叢書

■宗教の新意義（三編分） 谷本博士
■神社崇敬と宗教（五編分） 廣池博士
■宗教入門 江部鴨村
■神道綱要 西川光次郎
■救世軍 同
■カラマゾフ兄弟（六編含有） 森田草平
■シヤクンタラ姫 同
■大聖釋尊 江部鴨村
■高僧と母 同
■續高僧と母 同
■俳聖芭蕉 岡本默骨

■道元と親鸞（四編分） 村上博士
■天理教祖觀（五編分） 奥谷文智
■金光教觀 和泉乙三
■親鸞と法然 村上專精
■立正安國論略解 柴田一能
■教徒として見たる天理教 廣池千九郎
■耶蘇基督 前島潔
■カーライルの宗教 淺海琴一
■近代思想と宗教 柏原祐義
■十六羅漢 山邊習學
■オーガステイン論 小宮豊隆

文藝思潮叢書

名流論作

▼小説 父と母と娘 森田草平
▼小説 無用語 安倍能成
▼小説 銀座の夜 小宮豊隆
▼評論 藝術家と藝人 生田長江

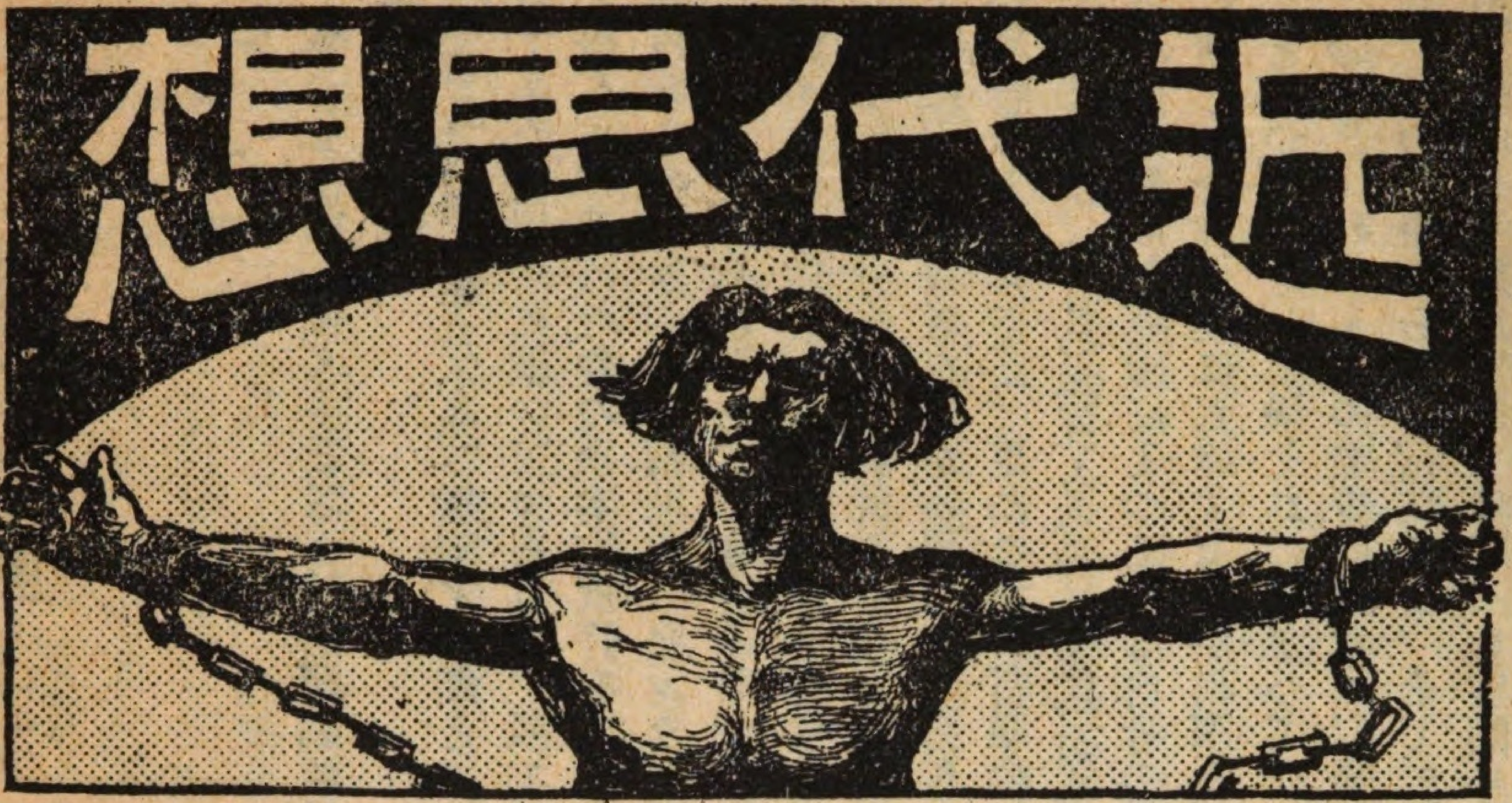
▼小説 三十三の死 素木しづ
▲小説 杏の落ちる音 高濱虚子
▼小説 一から四まで 河東碧梧桐
▼評論 文藝評論 小宮豊隆

古今名著眞髓 梗概叢書

■神曲（ダンテ） 森田草平
■ベル・アミー（發賣禁止）（モオパツサン） 德田秋聲
■懺悔錄（ルソー） 生田長江
■マダム・ボヷリー（フローベール） 相馬御風
■死の勝利（ダヌンツイオ） 水上齊
■英雄崇拜論（カーライル） 中村古峽
■ドリアングレー（ワイルド） 相馬泰三
■女の一生（發賣禁止）（モオパツサン） 廣津和郎

■春の眼ざめ（ウエデキント） 生田長江
■武器と人（シヨウ） 稻永挽歌
■ポオラ（外一編）（ピネロ） 加藤朝鳥
■クレオパトラ（シエクスピア） 永代靜雄
■オルレアンの少女（シルレル） 水上齊
■アルネ（ビヨルンソン） 相馬泰三
■決鬪（クープリン） 橋田東聲
■ベルグソンの哲學 牛田眞平

發行所 東京市本郷區元町 振替東京二八九一四 日月社



第三巻　第一號

築地の親爺

築地の親爺が死んだ。

築地の親爺とは、東京全市の車夫、及び京橋界隈の有らゆる種類の勞働者の間に、尊敬と親愛の眞心から呼ばれた、車夫野澤重吉君の通名であつた。其等の勞働者は、何か自分の身に持てあます事があれば、大小となく總て野澤君の所へ持ちこんだ。そして彼れは、本當に親爺のやうに、それ等の人の爲めに盡した。小は近所の夫婦喧嘩から、大は東京市内の殆んど有らゆる勞働運動に、野澤君の親切と熱心と勇氣との加はつてゐない事はなかつた。又、其の子供等の持ちこむ問題は、多くの場合に、何等かの形式の勞働運動を、彼れ野澤君に發意させたのであつた。

野澤君は可なりの資産のある農家に生れた。しかしまだ若い頃から家を出て、遂に都會の勞働者になり下がつた。彼れは、お上から授かる、所謂教育は持たなかつた。しかし彼れは、六十年間の生涯の、殊に三十餘年間の勞働と貧困との生活から授かつた、又彼れ自らの貪り受けた、本當の眞實を持つてゐた。彼れは、此の眞實によつて、早くから、骨髓からの社會主義者となつた。彼れは實に、此の日本に社會主義運動が起つた最初からの、最も熱烈な、そして最も不斷な、其の戰士であつた。そして此の一二ケ月以來、彼れは强度の勞働に堪へ得られなくなつた其のからだを、最後の奮鬪に献げんが爲めに、更に勞働者の間を縫ひ步く職業に轉ぜんとして、先づ甘酒賣りを、試みつゝあつた。

けれども、あゝ、あの元氣な野澤君が。この廿五日の朝、慈惠醫院に送られての廿日目。胃癌は遂に彼れの生命を奪つた。

あゝ、築地の親爺が死んだ。

—榮—

勞働運動とプラグマティズム

大杉榮

（一）序論

嘗つて僕は『個人主義者と政治運動』（早稻田文學四月號所載）の中に、

『事若し長い年月の間、無知と愚鈍とのうちに餘儀なくされてゐた勞働者に就いてゞあれば、敢て僕は其等の勞働者に對して、豫め社會の根本的批評を要求する事をしない。寧ろ有らゆる學者の所謂社會的學說などに耳を傾ける事なく、只だ其の生きんとする本能の命ずるまゝに、盲目的に行動する事を望む。これが彼等勞働者にとつての、現在に於ける彼等自身の最も眞實なる生活であり、且つ將來に於て更に大なる眞實をつかみ得べき、最善の根柢であり、且つ最善の方法である。更にこれを哲學的に云へば、斯くして勞働者は、今日の誤れる合理主義の弊を受ける事なしに、非理知的態度の連續によつて彼等自身の眞實を得つゝ、遂に新しき合理主義に到達する事が出來る。』

と云つた。そして猶それに附加へて、

『尤もこれを人類の進歩に見れば、最初行爲から思想を得、其の思想から更に行爲を得、そして其間に固定した思想を破壞して來た事が、時間にも空間にも普遍の事實であらう。そして今日の思想界に見れば、諸思想の停滯し固定した反動として、非理知主義若しくは行爲主義の起らざる可らざる時であらう。僕は哲學上の此の最近の運動が、寧ろそれよりも以前に、無知愚鈍なる勞働者の間に、只だ其の生きんとする本能の要求から、既に恐るべく力強い運動となつて、其の日常生活の間にすら實現されてゐる事に甚だ興味を持つ。これは殆んどすべての哲學者が卑んで顧みない勞働運動の中に、彼等の求めて未だ得ざる多くのものが見出されると云ふ、好個の一例證にもなる。又これは、僕が哲學なり政治なりを論ずるに當つて、屢々勞働運動を說く理由にもなる。』

と云つた。今僕は再び此の問題に歸つて、勞働運動とプラグマティズムとの關係を說いて、僕の此の見解を多少明かにして置きたい。

二　最近哲學の二大潮流

現代の哲學には、全く相反するが如き方向に流れる、二大潮流がある。

其の一つは、實驗科學の著しき進歩につれて、其の方法に全く安住してゐる人々の派である。此の人々と雖も、自ら全眞理を捉へてゐるとは、素より信じてゐない。彼等自らも、極めて小さな、しかも彼地此地に散らばつてゐる斷

片を持つてゐるに過ぎない事は、十分に承知してゐる。しかし彼等は、眞理であると認められ又認めらるべき一切が、即ち彼等の精神を滿足せしめ得べき一切が、科學的方法によつて、しかも此の科學的方法によつてのみ得られると、固く信じてゐる。然るに他の一方に、此の科學を無視してゐるのではなく、寧ろそれに非常な注意と敬意とを拂つてゐるのだが、所謂科學的方法に十分な滿足を感じない人々の派がある。即ち此の人々の精神殊に情感は、科學的方法によつて滿足され得ない、或る要求を持つてゐる。

今僕が此の二大潮流の簡單な說明の中に、其の一方に對しては精神、他の一方に對しては精神殊に情感と云つた如く、前者は理知若しくは理性を重んずると共に、後者は本能若しくは感情を尙ぶ傾向がある。そして此の何れもの傾向に、濃淡强弱の度のいろ〳〵ある事は、云ふまでもない。しかし概括して、前者を科學派（Scientism）若しくは主知派（Intellectualism）、後者は實際派（Pragmatism）若しくば非理知派（Anti-intellectualism）と呼ぶのに、差支へはあるまい。

實際派は、科學派の主知主義と主理主義（Rationalism）とを批難して、科學を利用しつゝ、科學のそとに又は時として科學に反對して、眞理を得ようとする。科學派の重んずる理知や理性を人間の皮相の才能であると見做して、更に其の根本のものであると認める感情や、本能や、傾向や、欲望や、又は憧憬を尙ぶ。此の實際派に據れば、理知や理性の所產たる科學は、自然に對する吾々の能力を確めるものに過ぎない。事物の利用を吾々に敎へるに過ぎない。其の本質に就いては何事をも敎へない。吾々自身が如何なる本質のものであり、又吾々が何處より來り、何處に行き、若しくは何處に行かんとしつゝあるかは、吾々自身の非理知的根柢又時としては無意識の裡に求めなければならぬ。吾々の暗い憧憬や本能は、吾々の理性の明るい判斷よりも、遙に善く其等の事を敎へてくれる。科學は、無視し蔑視すべきものではないが、しかし二次的の智識に過ぎない。第一の本當の智識は、吾々の情感的直覺の裡に求めなければならぬ。科學は吾々に物質的滿足を確める。しかし何等の精神的滿足をも與へない。

三　科學の所謂破產

科學派と實際派とを比較する時、直ぐ吾々の頭の中に浮んで來るのは、科學の破產と云ふ言葉である。此の科學の破產によつて實際派が產まれ、實際派の勃興によつて科學の破產が確められた、と屢々云はれてゐる。

此の所謂科學の破產は、既成科學其者の不完全と、及び或る科學者等の態度の愚昧と不遜とから生じた。即ち或る學者等は、科學の急速な進步に醉はされて、科學の萬能を信じ、又科學の既成法則を以て不朽の眞理であるかの如く說いた。けれども科學其者の更に新しき進步は、其の既成のしかも根本の、多くの法則を打破つた。

例へば天文學者や物理學者は、諸種の現象の間に、或る關係即ち物理的法則の存する事を發見した。次いで多くの

學者等は、更に詳細に亘つて、此の法則の適用を研究した。が、やがて此の研究によつて幾多の事實が蓄積されるに從つて、其等の學者等は、先きの法則によつて說明すべく餘りに諸事實の紛糾錯雜してゐる事を覺つた。

諸惑星の太陽の周圍に於ける運動に就いての、かの有名なるケプレルの法則の如きも、矢張り此の塲合を免れる事が出來なかつた。惑星の運動に關する精密な研究は、最初此の法則の眞實である事を確めた。即ち太陽の諸衛星は、太陽を中心とする隋圓に沿ふて、運動する事が證據立てられた。けれども天文學の更に新しき進步は、諸惑星が隋圓に沿ふて運動しつゝある間に、諸種の迷行の生ずる事實を發見させた。

即ち先きの所謂法則は、數學者の常に用ひる、第一近似價（First approximation）であつたのだ。そして此の第一近似價は、それが發見されたのと同じ科學的法則によつて、必然に且つ當然に、更に第二若しくは第三近似價に移らうとしてゐるのだ。そして又、此の第一近似價の破滅に乘じて、從來の科學の不完全と科學者の愚昧と不遜と又科學其者の或る方面に於ける無能とを批評しつゝ、更に異なれる方法によつて、第二若しくは第三近似價を求めようとしてゐるのが、かの實際派の哲學者であるのだ。

然るに科學派の學者は、精神と物質との一元論から出發して、此の兩界の何れの研究にも科學的方法を以て進まうとする。又實際派の哲學者等は、其の所謂事物の皮相たる物質界の研究を科學者の爲すがまゝに委ねて、其の所謂事物の本質たる精神界の研究に特殊の方法を以て自ら任ぜようとする。されば問題は、此の精神界の研究に於て、科學派の歸納法と實際派の直覺法との何れが、第二若しくは第三近似價を得る事に成功するかに歸着する。

三　プラグマテイズムの精神

以上は科學派と實際派との、何れにも出來るだけ善意的な從つて最も公平な大體の比較であるが、しかし實際派の起原を見るに、精神界と云ふよりも寧ろ社會界に於ける眞實を求める爲めに、所謂科學的方法の訂正として現はれたものであつた。

物理學や化學などの所謂正確科學では、從來の科學的方法で十分であるかも知れぬ。けれども其等の科學に馴れた學者等は、兎角に人間の本能とか意志とか感情とか憧憬とかを無視して、只だ知力と理性とに重きを置く傾向があつた。そして此の知力や理性の上に築かれた體系を以て、眞實であり法則であると見做して、猶それを一定不變の絕對的のものであるとまで斷定して了つた。此の主知的主理的眞實の中には、本能や意志や感情や憧憬を無視した所に全的人間味が缺け、又不完全な人間の知力や理性を過重した所に必然の誤謬があつた。從つて所謂社會的法則や眞實は只だ理窟ずめのもので、實際に於て人間離れのした又實際の生活と適合しない塲合が多かつた。そこで此の缺點を補ひ、此の誤謬を正さんが爲めに、等しく觀察と實驗とに據る科學的方法を用ひつゝ、只だ其の觀察や實驗を知力や理

性の上よりも寧ろ本能や行爲の上に基かせた、プラグマティズム即ち固有の意味の實際主義が生れたのであつた。

此の意味のプラグマティズムは、一八七七年十一月及び一八七八年一月の『通俗科學月報』に始めて此の言葉を用ひた、亞米利加の科學者ピアスの創見であつた。

プラグマティズムとは行爲の哲學、結果の哲學、利益の哲學である。或る思想の眞僞を判斷するのに、直ちに理性や論理に走る事なく、先づ行爲に赴いて見る。即ち其の思想を實際問題と打つからして見る。そして其の行爲の齎す結果により、利害によつて、其の思想の眞僞を決定する。斯く有らゆる思想を、夢みながらではなく生かして、抽象から具體に移して、試して見ると云ふ方法には、第一の條件として意志を要求する、精力を要求する。ピアスの此のプラグマティズムは、更に故カリフォルニア大學教授ヂェムスによつて註釋を加へられて著しく宗教的となり、又オクスフォルド大學教授シラアの人本主義となり、更に又ベルグソンの創造說となり、種々に發展し變化して遂に先きに述べた今日の實際派的大勢を形づくるに至つた。しかし要するに固有に云ふプラグマティズムの起原と其の根本とは、此の行爲と及び其の要求する意志と精力とによつて、主知主理派の科學的方法の訂正を企てたものであつた。

四　センデイカリズムとプラグマティズム

けれども從來の所謂社會的法則若しくは眞實が、多くの場合に虛僞であり或は容易に其の眞僞を判斷され得ないのは、社會科學其者の又は其の研究方法の今云つた意味での不完全であると云ふ外に、實際派の哲學者輩の全く知らないしかし吾々の忘れてはならない一大理由がある。即ち學者や哲學者も亦吾々と同じ人間であつて、其の屬する社會的階級の定心を持つてゐる。彼等の多くは、少なくとも有閑階級に屬し、又直接に權力階級に附隨してゐる。社會が利害の相容れない征服階級と被征服階級との兩極に分離して、學者が征服階級の定心を持つてゐる時、其の所謂社會的眞實が、多くの場合に於て、被征服階級の生活事實に適合しない事は云ふまでもない。

勞働運動は、更に廣く云へば一切の民衆運動は、此の征服階級の所謂社會的眞實に對する、生活の上からの最初は無意識的の反逆であつた。又プラグマティズムは、社會の此の階級的區別を少しも考察の中に入れない、只だ主知派の所謂社會的眞實に對する、方法の上からの最初から意識的の反逆であつた。そして前者の生活の上からの反逆が、後者の方法の上からの反逆と、再び最初は無意識的に一致したのであつた。

猶僕は此の事實の一致と同時に、極端なる實業主義の亞米利加に、ピアスやヂェムスのプラグマティズムと共に所謂I・W・Wなる勞働黨が生まれ、そして極端なる主理主義の佛蘭西に、ベルグソンの創造論と共に所謂C・G・Tなる勞働黨が生まれた事實の一致に、等しく亦非常なる興味を持つものである。

C・G・T　即ち勞働總同盟　(Confédération Générale de

Travail）のセンディカリスムは、勞働運動に於けるプラグマティズムの最もよく具體化せられた權化である。

　センディカリスムは、無知なる勞働者の日常生活の間に其の日々の資本家との闘爭の間に、殆んど自然的に出來上がつた運動である、理論である。尤もセンディカリスムは其の長い間の形成の行程の間に、社會改良主義から無政府主義に至る幾多の社會的學說の影響を受けてもゐるが、其等の學說の指導の下に形成せられたと云ふよりも、寧ろ勞働者が只だ生きんとする本能に驅られて、右往左往の間に其等の學說を行爲によつて吟味しつゝ、遂に彼等の生活其者の經驗と直覺とから不斷の流轉を經て創造されたものである。彼等は最初から理想を持たなかつた。又定まつた運動方法を持たなかつた。素より何等の社會的學說を持つてゐよう筈もなかつた。彼等は只だ盲滅法に、其の目前の死から遁れんが爲めに、更により善く生きんが爲めに、彼等の能ふだけの全力を盡した。斯くして彼等は彼等自らの血と肉とを以て、彼等自らの眞實を築き上げたのであつた。

　彼等は其の長い努力の間に、種々なる社會的學說に賴つて盡く失敗した結果、一切の社會的理論を斥けて、只だ彼等自らの經驗にのみ賴る事となつた。より善く生きんとする意志から、其障碍となるべき一切の事物に打つかつて、其結果の中から彼等自身に利益のあるものを選び出した。彼等の運動方法も、彼等の團體の組織も、彼等の將來の理想も、彼等の道德も哲學も、すべて皆な理窟でこね上げたのではなく、只だ有らゆる事實と打つかつて見て、其の結果として獲得したものである。此の事に就いては、『個人主義者と政治運動』の最後に、其の事實の大體を述べて置いたので、今此處には再說しない。

五　センディカリスムと無政府主義

　然るに僕は、此等の一致の外に、猶もう一つの甚だ興味深い一致を持つてゐる。それは、全く科學的方法によつて形成された無政府主義と、實際的方法によつて形成されたセンディカリスムとが、即ち別個の方法によつて獲得せられた各々の社會的眞實が、其の最後の結論に於て略ぼ相合致した事である。そして僕は、此の合致の中に、先きに云つた現代哲學界の二大潮流たる科學派と實際派との今後の交渉を、朧げながらも暗示せられたやうな氣がする。此のセンディカリスムと無政府主義との結論の一致に就いても既に『個人主義者と政治運動』の中に大體を述べてあるので、今此處には再說しない。

　無政府主義は、人間の本能や感情や意志や憧憬やを無視する、又社會の階級的分離を無視する、所謂主知主理的の學派ではない。無政府主義は、觀察と實驗とによつて幾多の事實を歸納しつゝ、又人間を全人的に取扱ひつゝ、社會的眞實を求めんとした一科學派である。そして此の無政府主義と、單により善く生きんとする活潑な本能の衝動から有らゆる社會的事物に打つかつて來た結果のセンディカリスムとの一致は、科學的方法が少なくとも社會的眞實の探究に於て不完全なものでない事の證據ではあるまいか。更

に進んでは、社會的眞實のみならず所謂精神的眞實の探究に於ても、それが十分に行はれさへすれば等しく亦不完全でない事の暗示ではあるまいか。果して然りとすれば、最初のプラグマテイズムから發展した諸種の所謂實際派は、科學の所謂破産に對する反動として、正鵠を越えた極端にまで走つたものではあるまいか。

そこで何等の野心をも抱かない、眞面目な智識者の、勞働運動に對する態度は、次の如く決定せられる。

彼れは、自らの有する社會的學説の外の一切の社會的學説を、虚僞であると信じてゐる。けれども勞働者は、其等の學説の何れが眞僞であるかを批評し確證する、知的能力を持たない。從つて彼れは、自らが眞實であると信ずる學説をも、出來上がつたまゝ勞働者に強いる事は出來ない。

彼れは只だ、勞働者が本當に其の生きんとする本能に從つて行動するやうに、有らゆる事實に打つかつて見る意志を得しめればいゝ。彼等の思ふまゝに行動せしめて、其の打つかつて見た上での判斷を彼等自身に爲せればいゝ。そして絶えず打つかつて行く方法を講じさせればいゝ。斯くして勞働者は、始めて諸社會的學説に對する、自分自身の批評が出來るようになる。即ち自らと社會的周圍との關係に就いての、本當の知識、本當の自覺が出來るやうになる。

附記。此の論文は、近く『生活と藝術叢書』の一編として現はるべき『勞働運動の哲學』の中に、更に詳細にそして更に多岐に亘つて、敷衍發展せらるる筈である。目下執筆中であるが、十月中旬には公にし得るかと思ふ。（廣告面參照）

問題文藝論

荒川義英

早稻田文學の中村星湖氏あたりから出て、問題文藝と云ふ文字が旺んに彼方此方の雜誌に現はれ始めた。

乍然私は思ふ、斯うして批評家連が先づ口を切つて、それから後作者が、その方向へ正直に進むと云ふことがあり得やうか。いかに模倣國の事だと云へ、斯くまで不見識な藝術家が幅を利かす時が來るだらうか。中村孤月氏が『大作雄編いでよ』と標題をつける。誰か大作雄編を望まざるものがあらうか。現に説かれてゐる問題文藝に對する議論も多くは孤月氏と五十歩百歩の上つすべりな、思ひつきによつて無責任に發言されてゐる。生田長江氏は『柄になき彼等に問題小説や、問題劇を強ひやうとするのでない』と云つてゐる。確かにそうである。けれ共更に一歩をすゝめて嘘にもそんな事は強ひない方が好いだらう。強ひられて作り上げたものが藝術品でない事は云ふまでもなく、そんな動機で作られたものが眞實性に乏しい——藝術品の骨拔き——のは當り前だ。故に、問題小説の可否は云ふものに任す、しかし強迫的な筆致をもつて言ふは無益だらう。

しかし問題小説、問題文藝、此の傳習的な名目の下に要求される作品は、結局讀者の求める所であるは事實である。かつて自然主義の全盛時代にトルストイなどは宗教小説の黴の生へたものとして取扱はれてゐた。中途半端に解釋されたモーパスサンの藝術が凡てゞあると思はせた時代を通過したのだ。問題小説と今云はれる物の内容は、要するに過去の如く筋の經過を主眼としたのを特長とすると云ふのではあるまい。問題と云ふのは寧ろ客觀的方面より云つたもので、製作者の側から云へばその人の社會的自覺の深まるにつれて必然帯びて來る色とか傾向とかを指すのであらう。故に『問題』と雖も亦内發せる必然の一様式でなければならないのだらう。

二種の個人的自由

——福田博士の新社會論を讀む——

大杉榮

一

堺利彦氏の『月刊新社會』と同時に、慶應義塾大學教授林毅陸氏の『新社會』が出た。林氏は外交史の専門家であると共に、政治上には常に英吉利流の民主制を鼓吹してゐる人である。從つて其の所謂新社會なるものも、要するに其の平素の主張の外には出ない。

然らば此の英吉利流の民主制とは如何なる性質のものかと云ふに、『新社會に寄せて眞意義の新社會を論ず』と云ふ福田徳三氏の一文は、大日本帝國の大學教授としては有るまじき露骨と大膽とを以て、これに答へてゐる。英吉利流の民主制は、獨り林氏のみならず、多少進歩せる殆んど有らゆる學者の、そして又所謂政治的に目覺めた青年の、理想する新社會である。されば今此處に、福田博士の新社會論を紹介敷衍して、彼等の所謂新社會の性質を喝破して、眞意義の新社會を闡明して置くのも、あながちに無益な事ではあるまいと思ふ。

新社會の如何なるかを説く前に、先づ舊社會、即ち現社會を知らなければならぬ。此の舊社會は、『其の根本の基礎に於ては、西洋で云へば佛國大革命以後の產物で』、『此の佛國大革命前後に成立した舊社會の根本主義は、身體財產の安固を本位とする個人的自由之れである』。そして此の原則は『今日に於ては、英吉利に於て最も完全に發達してゐる』。

斯く福田博士は、身體財產の安固を本位とする個人的自由が舊社會の根本原則であると、極めて簡單に云つてのけて了つてゐるが、實は此の身體と財產との二つの文字の間には、もつと明確な區別をして置かなければならぬ。即ち身體の安固の方は、舊社會の其の又舊社會たる舊々社會からの被征服階級の要求であり、そして財產の安固の方は、此の舊々社會の新勃興階級即ち今日の征服階級の要求である。換言すれば、舊社會の原則たる個人的自由は、征服階級と被征服階級との何れもの要求の混淆したものである。

元來いつの社會でも、或る一原則を有らゆる生活欲望の上に論理的に應用し發展せしめた、結實ではない。幾多の闘爭と妥協との、過去の遺物とより善き將來への憧憬との、極めて復雜せる結實である。過去の影と將來の像、石器時代以來の習慣や思想と、漸く地平線の上に出かゝつてゐる將來への傾向、それ等の一切が、各個人の中にも各社會的階級の中にも、各世代の人々の中にも、又其の社會全體の中にも、不斷の闘ひを闘つてゐる。そして此の混沌たる社會事實を分析解剖して、吾々の既に獲得した事と、吾々の猶將來に獲得せんと欲する事とを確め、斯くして吾々の何處に行くべきかを決定する、これが最も進歩せる最近社會學の最後の目的である。

二

十二世紀以來の歐洲諸國に行はれた

一切の民衆的大闘爭、大革命を觀察するに、吾々は其處に嚴然たる一大主潮の貫流してゐるのを見る。即ちそれ等の民衆的大闘爭は、太古の奴隸制が多少緩和された形式の下に殘つてゐる、農奴制の廢滅を目的としたものであつた。農夫か工人か、或は其の兩者が、主人の利益の爲めに法律によつて課せられてゐた强制的勞働から、自らを解放せんとする企圖のものであつた。自らの身體を自由に處置し、自ら欲する事に又自ら欲する間だけ勞働する權利を獲得する、これが有らゆる民衆的革命の目的であつた。十二世紀に於ける各地の自治共產村落の暴動、十五六世紀に於けるボヘミヤ、獨逸、又は和蘭の農夫の一揆、一三八一年及び一六四八年に於ける英吉利の革命、そして最後に、殊に佛蘭西の大革命は、何れも皆な此の主潮の奔流激潭であつた。

尤も此の目的は、僅かに部分的に、又皮相的に、成就せられたに過ぎなかつた。個人が自らを解放して、其の個人的自由を獲得すると共に、更に新しき經濟條件が彼等の上に殺到して、饑餓の攻め道具の下に、再び其の自由を奪つて、新しき鎖の桎梏に繋いで了つた。一八六一年の露西亞に於ける農奴解放は、此の消息を最も明白に語る、好個の一例證である。彼等は其の永年耕作し來たつた土地を主人から買受けなければならなかつた。解放後の彼等が、直ちに零落し貧窮して、もとの奴隸的境遇に復歸したのは當然の事である。そして露西亞に行はれた此の事が西歐諸國の到處にも、同樣に行はれたのであつた。身體上の束縛たる農奴制は廢止せられたが、奴隸的境遇は、新しき形式即ち經濟的形式の下に、依然として維持せられたのであつた。

しかし近代社會の首要原則は、少なくとも理論上各個人の爲めに要求せられた、個人的自由と云ふ事であつた。法律に據れば、勞働はもはや何人にも强制的ではない。各人は其の欲する事に又其の欲する間だけ、自由に勞働すればいゝ。

これが、少なくとも理論上に於ける近代社會の首要原則であり、そして其處に亦必然に近代思想の主潮が現はれてゐるのだ。

三

先きにも云つた如く、此の所謂自由が事實上如何に妄想的のものであるかは、有らゆる流派の社會主義者等が常に說く所である。幾百幾千萬の老弱男女は、饑餓の脅迫の下に、其の自由を棄てゝ、主人の欲するまゝに其の勞働を掠奪せられてゐる。種々なる新しき形式の下に、昔時の農奴時代と同樣に一週三日間若しくは屢々それ以上の勞働を强制せられてゐる。

しかし此の勞働は、今日ではもはや一主人が法律によつて各勞働者の身體に賦課してゐるのではない。これには極めて復雜なる非人格的、非責任的の組織が出來てゐる。勞働者は昔時と同樣に其の勞働の大部分を掠奪せられるのであるが、今日ではもはや、それが主人の鞭の下に行はれるのではない。勞働者は工場から逐ひ出されもする。饑えに迫つても食へないやうにはされる。しかし甞つて歐羅巴諸國の到處に行はれた如く、畑の耕し方が惡いからと云つて、又着物の縫ひ方が惡いから

と云つて、警察の一室に列をつくつて笞刑を受けるような事はない。

斯く舊時代の制度に比すれば、却つてより峻酷な此の現代の制度の下に於ても、猶勞働者は、一たび得た個人的自由の感情を失はないでゐる。此の感情が勞働者にとつて殆んご妄想である事は云ふまでもない。けれども吾々は又、近代の一切の進化が、將來への吾々の一切の希望が、よし現實の自由の如何に局限せられてゐても、兎も角も此の自由と云ふ感情の上に、其の基礎を置いてゐる事を認めなければならぬ。そして此の感情は、或る權利を獲得し若しくは維持する爲めに、勞働者をして數ヶ月の饑餓を忍ばしめ、又は軍隊の銃劍を冒してすらも進ましめる程、近代人にとつて貴重なものとなつてゐる。現に今日歐羅巴諸國に行はれる最も頑强な同盟罷工は、賃銀の問題よりも寧ろ自由の問題を、其の首要原因としてゐる。近くは英國政府の徵兵制度創設計畫に對して、同國勞働者が總同盟罷工の宣告をなし、軍國政府の瓦解を來たさんとした。

四

勞働者の身體の解放は、舊社會の理論的原則であると共に、此の自由の觀念と感情とが、勞働者の頭腦に深く浸みこんで了つた。觀念力と感情力との社會的創造を力說したい僕は、殊に此の點に注意を向けさせられる。

然らば舊社會の一原則たる此の身體の自由が何故に單なる理論上に止まつたかと云へば、舊社會の他の一原則たる財産の自由が事實上に優勢を占めたからである。佛蘭西大革命は、一面に於て勞働者階級の身體の自由の獲得であつたと共に、他面に於て當時の新勃興階級たる資本家階級の財産の自由の獲得であつた。勞働者階級は彼等自身の自由の爲めに、資本家階級と共に當時の王侯貴族に反逆したのであつたが封建社會の破壞するや否や、新社會の建設の一切を資本家階級に委託した。斯くして資本家階級は、其の財産の安固を事實上の社會原則となすと共に、勞働者階級の身體の安固を只だ理論上の社會原則と化して了つた。これが現代社會の、即ち其の二大原則の、矛盾である。そして其の矛盾の衝突から、更に新しき社會が生れんとするのだ。

『現社會に不滿あり、慊らずとするものは、畢竟此の根本的不安に滿足せぬ事の謂である。所謂個人本位の自由主義とは、其の實、有てるもの丶自由主義、有産者の個性の尊重であつた。有たぬもの、無産者の個性の尊重は、毫も其の中に含まれてゐない。所謂平民階級は、其の身體も、其の財産も、保護せられない。彼等は保護せらるべき何物をも持つてゐない。』

『此の社會の政治は畢竟有産者の政治である。所謂政黨など丶云ふものも、若干の取除の外は、悉く是れ有産者の機關であつて、無産者の利害とは沒交渉である。所謂議院政治と云ふ事も、平民階級の立場から云へば、畢竟一の權力機關に過ぎざるものであつて、彼等の存在に是非なくてならぬ程の重要なものではない。』

『斯く舊社會の根本的立場が、身體財産の保障なき社會の大多數にとつて全く無意味である事が分つたら、新社會に向つて要求すべき事は、先づ第一

に此の虛理を破壞し、新道德原則を打ち立つる事にあるべきは多言を要すまい。即ち有名無實なる身體財產の保護を廢して、代ふるに名實相具ふる生活の安固を以て根本原則とする新社會を建てる事である。』

五

此の眞意義の新社會を建設せんとしつゝあるものは、云ふまでもなく廣い意味での社會主義者の全部であるが、流石の福田博士も此處は遠慮して『所謂社會政策とは、極く僅かではあるが此の根本に觸れた、又は觸れんと欲してゐるものである。即ちすべての社會的學問のうち、新社會の實現に意を用ひる事最も多きものと云つて大過はない』と云つてゐる。しかし博士の此の遠慮も、次に引用するが如き、現代の所謂民主的社會に於ける法律や、教育やの大膽なる批評によつて、十分に償はれる。

先きの社會政策と『正反對の極點に立つ者は法律諸學就中私法である。私法は私權の擁護を最高の眼目とする。そして此の私權とは、人が法律の許す範圍に於て主張し得る、利益の事である。即ち主として財產權である。換言すれば有產者の自己利益である。無產者は何等の利益をも持たない。從つて事實に於て何等の私權をも享有しない。故に無產者に取つては、私法なるものは、殆んど何等の意味をもなさないのである。』

『此の私法制度の下に於ては、財產を有するものは其の個性を尊重せられ自己の伸張をなし得ると雖も、財產を有せざるものは個性を認められる事もなく、從つて何等の自己伸張をもなし得ない。却つて個性は滅却せられ、自己は萎縮するのみである。所謂犯罪とは、斯く個性の蹂躪せられた結果として起るもの、最大多數を占めてゐる。財產に關する犯罪とは、多くは財產なきものが財產あるものを侵すことである。これは個性を維持し、個性の道德を守るだけの、財產のない爲めに起る事である。然るに今日の舊社會は、此の有產者に對する侵擊を以て、直ちに新社會共者に對する侵擊として取扱つて、此の標準から之れを制裁する。しかし其の實、新社會共者が少しも侵害されない場合も、隨分尠くはないのである。』

『今日の教育は、有產者と無產者に對して擁護するに必要な、道行を教へこむに過ぎない。殊に我國でよく人の口にする、常識の教育、紳士の教育などゝ云ふものは、明ら樣に有產者の教育である事を標榜してゐる。彼等の所謂常識とは有產者を尊重する事である。彼等の所謂紳士とは有產者の事である。今日の文明國に於て、最も多く此の有產者保護の社會制度の發達してゐるのは英國である、從つて常識の教育とか、紳士の教育とか云ふ事も、英國に於て最も尊重せられてゐる。けれども要するに紳士の常識とは、馬鹿でも金のある者は旦那たり、賢くも金のない者は從者たり、そして從者は旦那の命維れ奉じ、敢て逆ふ事勿れと云ふ事である。金のないものは其の個性を主張せざれと云ふ事である。されば金なくして個性を主張するものは、一概に皆な、非常識、沒常識、非紳士的として擯斥せられるのである。』

事實と解釋

荒畑寒村

■悲觀より樂觀へ

歐洲戰亂勃發の當初、貿易沈滯を豫想して悲觀せる日本の朝野は、今や滔々として到來する聯合國の軍需品大註文の爲めに、却つて安堵樂觀の有樣である。現に既に政府が露國から引受けた軍需品は、約二億萬圓の巨額に上つて居る。更に民間に在つては、大倉組は新たに十一月以降無期限で每月十萬足概算八十五萬圓に當る軍靴製造を露國から引受け、日本車輛、大阪汽車會社、及び川崎造船所等へは、露國から車輛組立一萬五千輛、三百萬圓の註文あり、大阪の豪商山口嘉藏は浦鹽の某會社と千七百萬圓の軍需品賣買契約を結び其他露國から大阪へメリヤス二百二十萬組の大註文が來たといふ事である。

■職工の大募集

兎に角、此の不景氣の最中へ、是れだけの大註文があつたのであるから、金も隨分動いて居るだらうし、事業も旺んになつて居やう。隨つてまた、失業に苦しんで居た勞働者が新たに職業に有り付き、既に職業に就いて居る勞働者はやゝ多額の賃銀を得て居るといふ事は、疑ひも無く事實であるだらう。現に陸軍省の如きは、露國政府註文の軍需品が餘りに多額なる爲めに、到底砲兵工廠のみでは製造が間に合はず、各地の製鐵所をして請負はしめて居るが、東京砲兵工廠は此の機に乘じて大擴張を試みんとし、先づ横須賀に支廠を設置せんとの計劃あるやに聞いて居る。また同工廠は昨年一時に數千名の職工を解雇して物議を釀したが、最近には少なからざる男女職工を募集し、殊に王子工場の如きは數萬人の大々的募集を實行した位で、平時に在つては一萬二三千の職工數が、今日では三萬五六千に達して居る。

更に陸軍當局と民間實業家との間に、兵器民營の計劃が成り立たんとして居るし、其他前述の如き民間の軍需品引受の外、最近に住友、古河等の手から輸出された銅の地金類は夥しき額に達し、從來一噸六十五圓の鐵は、急に百三十五圓に上騰したといふ位である。

■失業者減ぜず

事實は何處までも事實である、吾々は强ひて此の事實に眼を閉ぢ、或は故意に無視しやうとするのでは無い。然し乍ら、此の事實の爲めに、多數勞働者は眞に果して利益を得つゝあるか、失業の苦難、不景氣の苛責より免がれて居るであらうか。それが吾々の知らんと欲し、知らしめんと欲する問題なのである。

東京砲兵工廠が職工の大募集を行ひたる由は既に述べたが、然らばその結果、東京市內の失業者に抑々如何の影響を及ぼしたか。小石川職業紹介所主任の言なりとして新聞紙上に載せられた處に據ると、同所は流石に砲兵工廠、大塚兵器廠に近く、王子工場とも接近して居るので、工廠が數萬人の男女を募集すると共に多少求職者の數を減じたのは事實である。然し地方から出京して履歷書は差出したが、一向入れる見込が無い爲に、紹介所の門を潜る者も、之に準じて增加したといふ事である。

淺草、神田の二紹介所は每月約四百名の求職者があるが、砲兵工廠が盛んに職工を募集せる際と雖もさして變りは無く、八月中も依然三百數十名を算した。更に芝紹介所の如きは、勞働の求職者少くして多くは事務員の如きを希望するから、砲兵工廠の增員とは殆んど交渉が無いさうである。

■失業は普遍的現象

陸軍省が小石川、王子、乃至大阪等の各砲兵工廠に三萬乃至四萬の人員を募集するとせば、之は更に他の、少くとも軍需品製造に關する諸工場の職工增加と相俟つて、その土地

の失業者の大部分を吸收すべき筈である。然るにその然らざる所以は何であるか、失業者は依然として求職難を訴へつゝある原因は何れに在るか、求職者の增すとも減る事無き理由は何處に潜んで居るか。

此の答へは案外簡單である。即ち今日の失業問題なるものは、更に一地方或は一部市內の偶發事に非ずして、實に全國に亘れる普遍的現象だからである。故に若し何工廠或は何工場かゞ職工を募集すると云ふ事が一度地方に擴まつたが最後、それこそ水の低きに着くやうに各方面から押し寄せて來て、ちつとやそつとの就職者の穴はすぐ埋められて了ふのである。だから三四萬位の人間が新たに雇ひ入れられたとしても、失業問題の大勢には毫も變化無く、失職者は殆んど無盡藏なるかの如き觀を呈して居るのである。

では何故に斯く失業者が多いかと云へば、その原因は一二にして足らぬ。また昨日や今日に、卒然として起り來つた問題でも無い。要するに永年の間馴致し來れる、勞働者の購買力の不足が、積り積つて二進も三進も往けざる經濟的恐慌を惹起したのであつて、軍需品製造に對する職工の增加位ゐで却々急に恢復する筈が無い。殊に最近某紙の傳ふる處に據れば、靜岡市の茶商石垣某等の資產家連は近頃の米價下落に伴ひ各種の物價下降せるにも拘はらず、大工左官の賃錢のその儘なのは不都合だとなし、日當八十錢を六十錢に引下ぐべしとの交涉を大工組合に提出したる由。此の問題は惹ひて各日傭賃の値下を導びくべく、職人間に大恐慌を生じて居るといふ事である。また淺草玉姬町、下谷龍泉寺町、萬年町、本所三笠町等の細民窟では、打ち續く不景氣の爲に、米のみ如何に安くても仕事が絕無なる爲に、欠食が普通になつて居ると云ふ。惟ふに如上の問題は、獨り靜岡市のみに限られずして、今後各地に起るべき、また起りつゝあるものであらう。而して勞働者の生活、境遇、運命は、資本家の富むに反比例して、更に益々悲慘となり行くであらう。

■高い處へ土盛

僕は勞働者の生活が、資本家の富むに反比例して悲慘となるだらうと云つた。如何にも資本家は這般の軍需品の大註文に依て巨利を博して居る。大倉や、三井や、岩崎や、住友や、古河や、高田や、彼等は今やその平生の忠君愛國の勘定書に對して、高價なる支拂ひを受けつゝあるのである。

然し乍ら、玆にもより大なる資本を有せる强者は、より小なる資本を有せる弱者を食ひつゝある。玆にも大の蟲を助けんが爲めに、小の蟲は殺されつゝあるのである。日本の聯合國に對する兵器賣込は、三井、大倉、高田の三資本家が出資して創立せる泰平組なるものゝ獨占して請負へる處であるが、賣込と云ひ輸送と云ふも實は聯合國と日本政府との間に仲介してコムミツシヨンを得るに過ぎぬ。而して此の泰平組は、三十年式小銃を十五圓に拂ひ下げられて、十六圓五十錢に露國へ賣り込んで居る、即ち約一割の巨利を貪つて居るのである。兵器の拂下と輸送との實力資格を有する者、豈啻に泰平組の三者に限らん。然も政府は畢竟『高い處へ土盛り』をやつて居るに過ぎぬ。

■戰後を戒心せよ

然り、資本家は儲け勞働者は苦しむ。然りと雖も、勞働者が眞に省みて戒心せざるべからざるは、寧ろ今日現在の苦痛に在らずして實に却つて此の戰亂終れる後に在る。

世間の新聞雜誌は今日の大戰亂を以て、恰かも何人も豫期せざりし偶發事の如く云つて居るが、實は歐米の爲政者及び資本家等の間には夙に期待されて居たのである。四五年來米國には恐ろしい經濟的恐慌が起つて居るがその原因は歐洲に大戰爭が勃發するか、乃至は日米間が開戰するだらうといふ豫想から、必然に軍需品の大要求が起るといふ見込を立てゝ之が製造をやつたに在る。處が戰爭は思

つたやうには俄かに起らないので、鋼鐵業、銅山、造船業等は、何れも工場閉鎖を行ふ如き悲況に沈淪した。

英國に在つては、一千八百九十一年に急に輸出がすばらしく增加したが、何人にもその理由は不明であつた。然しその原因は英獨間開戰の豫想の爲めに、大陸から盛んに軍需品の大要求があつたに基けるものである。然るに戰爭は遂に起らなかつたので註文も同時に俄かに中止となり、工場閉鎖、經濟的大恐慌所在頻々として相次だ。即ち軍需品の製造が俄かに中止せらるゝ時は、必ず經濟的大恐慌を惹起すること明白である。

日本とても御多分には洩れぬ。今日、砲兵工廠の職工募集に應じて職業にあり付き、若くは賃銀の增給に依て喜んで居る勞働者は、實に戰爭開始に先だつこと少時、砲兵工廠から一時に解雇されて困却し、悲嘆し、懇訴せる數千人中の一人で無かつたと誰が云はう。戰爭は無限には續かぬ、彼等が曾て開戰前に經驗せる苦い失業の味は、戰爭終了後に彼等を待ちつゝあるのである。資本家は流石に眼先が利く、彼等は獨り軍需品のみならず、吾が一般商品の需要益々增加せるに拘はらず、多額の資本を投じて一時の需要に應ずるも、戰後損失に終るべきを見込んで手控へて居ると云ふ。御用商人の憂ふる處は自家一己の小利益である、然し乍ら勞働者は更に進んで、全勞働階級の利益の爲めに、夙に今日に於て戰後の失業問題を考察せねばならぬ。之に對して豫じめ備ふる處無くてはならぬ。

■米價問題の矛盾

今日の不景氣を云ふ者、その一因を米價の低落に歸せざるは無い。何しろ昨大正三年は空前の大豐作であつた爲めに、大地主、米相場師等が儲からないで困るといふので、政府は御親切御節介にも米價調節策なるものを捻出して、農家の困難を救はんとした。然るに餘り安いので賣り澁つて居た大地主が一時に持米を手放したので、切角引上げんとした米價は更に一層暴落した位である。

處が本年は昨年よりもより以上の大豐作だといふ農商務省の豫想が發表されたので、米價は一日一日愈々益々暴落する一方に傾き、實に明治四十三年以來の安値の新記錄を作つたと云ふことだ。そして之が爲には大地主は祝すべき豐年をば却つて悲しんで居るといふ奇現象を呈して居るそうナ。何といふ愚かな笑ふにも笑へず、泣くにも泣けぬ矛盾であらう。今日、米が安くては儲からぬ米相場師さへも、猶且つ需要者としては、等しく『米が高くつちややり切れぬ』とコボすではないか。況んや小作農小商人、小役人、薄給の會社員敎師、巡査、新聞記者、職工、車夫、日傭取に至つては、何れか一錢の高値にも眉を顰め、一錢の安値にも胸を撫で下さぬ者があらう。實に米の需要者として米價の安きを求めず、米の豐作を希はざる者は、一人も無いと云つていゝのである。

然るに米の供給者としては、米作は凶作ならざるべからず、米價は高からざるべからずと云ふのだから不思議である。米を食ふ或は寧ろ食はんと欲する——者は、晴を氣遣ひ、雨を氣遣ひ、風を氣遣ひして米の豐作を祈つて居る。而して米を作る農民自身すらも、恐らく一人の凶作を希ひ、饑饉を祈りつゝ耕作して居る者があるであらうか。それで居て米が豐作だといつては悲しみ、米が安いといつては困るのは何故であるか。

吾々は玆に最ゝ愚劣にして殘忍なる現代社會の兇狀に當面する。即ち今日の社會に在つては、凡ては消費者の爲に生產せられずして、生產保管者の爲めに生產せられて居るのである。食も、衣も、住も、吾々の生活は吾々自身の爲にするに非ずして、只だ彼の米を作り、衣を作り、家を作れる者の慾望を滿足せしめ、その富を增加せしめんが爲に、遂行せざるべからざる義務なのである。吾々に此の義務さへも遂行する能力の失はれた時、米は如何に金庫に充ち衣は如何に居所に積まれ、

家は如何に雨露に朽ちても、吾々は最早やその消費を許されない。今日、米相場師と大地主とが、豐作を呪ふ程にも米の饒多なる時に當つて、諸君希くば諸君の隣人に問へ『君はよく食ひつゝありや』と!。

■放蕩息子の强請

猶軍需品の大註文ありたるにも係らず、一般經濟界が如何に不景氣の爲に惱みつゝあるかは、東西各地の都市に於ける金融の未曾有の緩漫を呈せる、銀行會社の企業計劃資本金額の減少せる等に依ても、その一般を伺ふことが出來る。今や實に日本全國の銀行家は、金貨の食傷に苦しんで、如何にかして此の横溢怒漲する資金の消化を計らうと焦慮して居る。即ち或は東西相提携して貸出最低利率の協定を行つたがダメ、又前途に露國藏劵發行鐵道證劵內地借換等があるが到底救濟は不可能だし、各銀行聯合し遊金を外國銀行に預金して內地遊金の減少を圖らうとしたが是もダメに歸した。そこで、東亞シンヂケート銀行團は此際政府の援助を藉り、目下御惱みになつて居る支那一億圓放資問題を始め、其他同團の活路を求めやうとして專ら秘密に運動して居る由である。

曩に歐洲戰亂勃發して吾が生絲貿易に一大蹉躓が起るや、生絲業者は聯合して政府に迫つて救濟策を求め、また米價の低落するや、政府は自ら進んで是が調節を圖つた。而して今やまた、銀行團は政府に請ふてその活路を招かんとして居る。何の事は無い、彼等は野良息子が放蕩して困つて來れば、すぐ國許の親父の處へ電報を打つて爲替を取寄せるやうなものだ。然し乍ら、正直にして勤勉なる勞働者は、如何に平生に於て貧窮に苦しみ、饑餓に惱んで居ても、曾て政府から一毫一厘の恩惠にあづかつた事無く、援助にあづかつた事が無い。エルベの謂ゆる『國家の繼子』なるもの、是れ今日の平民勞働者であるか。

■法律は蜘蛛の網の如し

近頃に於て、最も世間の耳目を聳動した事件は、蓋し代議士の瀆職事件であつたであらう。而して之が被告となれる前衆議院書記官長林田龜太郎以下十八名の代議士悉く有罪と決したが、然も社會の以て同事件の元兇と目し、豫審もまた明らかにその事實を認めて居る前內務大臣大浦兼武のみは、寬に起訴猶豫となつた。

吾々は此の事件に依て、二個の興味ある事實を見た。即ち一は此の事件に對して世間が案外寬大だつた事で、他は法律といふものゝ性質が明らかにされた事である。此事件の勃發當時、多くの政治家、學者等の多くは、之を許して寧ろ意外なる事件なりとなした。蓋し彼等は惟へらく、黄白を散じ、權力を揮ひ反對派の代議士を買收して以て所謂國政の進捗を圖るは、歴代政府の公然執り行つた政策であつて、獨り大浦某、村田某を責むべきではないと。讀賣新聞の如きに堂々と社說に於て、大浦の如き高官の辭職は、優に平民の入獄に相當せる刑罰であると論じた位であつた。果然、裁判所は大浦兼武を起訴猶豫として不問に附したが、その理由とする處、大浦の犯罪は惡性のものと云ふ能はざるのみならず、既に責を引いて官職を辭し隱居したのであつて、敢て刑罰に附せずとも充分に懲戒の實は擧つて居るといふに在る。然し乍ら大浦の贈賄が惡性で無いならば、如何にして代議士の收賄が惡性となり得るか。暫らく彼等の言ふ處を聞けば、所謂二個師團增設なるものは固と是れ國防の緊急事であつて、實に國家民生の利福の爲である。然らば此の所謂國防上の最高理想を行はんが爲には、買收するもせらるゝも、贈賄も收賄も共に等しく善であらねばならぬ。然るに買收せられたる代議士等は悉く有罪となり、獨り大浦のみ起訴せられざるは何故であるか。吾等は坐ろに『法律は猶蜘蛛の網の如し、大なる者は之を破つて過ぐ』と云へるベーコンの言を想起せざるを得ぬ。

職業病

宮嶋資夫

東京衛生試驗所附屬の衛生參考館には、吾々の見て以て參考とすべき物の多くが陳列されてゐる。

館内の階上階下に隙なく掛け連ねた、通俗衛生心得の繪解きには、惡疫、流行病等に罹る人は、安い魚を喰ふ人、汚い家に住む人、不潔な水を使ふ人達ばかりであると巧みに敎へてゐる。

階上第十一室には、謂ゆる職業病に冐されたる勞働者の病所の局部、若しくは全身の一部が、模型によつて示されてゐる。

先づ第一の箱には肺臓が澤山並べてある。最初に置かれた健全な人の肺は、芙蓉の花片のように快い淡紅色を呈してゐるのが、次に並べた煙草職工の肺は、全體が薄黄色くなつて、所々に小さな黒い汚點が出來てゐる。之れは長い間吸い込んだ、煙草の屑や塵埃の爲めである事は、何人も一見して了解するところであらう。

石工の肺は、薄黒い霜降りだつた。銅鐵工夫の肺には、鼠地の霜降りもあれば、全體が暗紫色に變つたのもある。ウルトマン(顔料)製造工の肺が、濃い淺黄色となつてゐるのには、見るからに重苦しい感じを與へられる。若し夫れ炭山坑夫の石炭のように黒くなつた肺の如きは、到底人間の身體の一器官とは思へない位であつた。

凡て夫れ等の肺も、曾つては健全な人の肺が示すやうに、鮮やかな血が流れては巧みに伸縮してゐたに違ひない。が、こうなつた所を見ると、銅や鐵や石の粉や、さては煙草の埃などが一杯にぎつしり詰つて、一分だつて伸びも縮みもしないようにしか見えない。

次の箱に移ると、そこには、痛風結節にかゝつた洗濯業者の手があつた。一體にうす青くむくんでゐて、然かもその指の關節は、薄紫色をして不格構に腫れてゐた。凍傷にかゝつた園丁の指の節は、豚の肪のような色をして、丸く大きく膨れてゐた。

化學職工の石炭酸に因れる壞疽は、指先が焦げたように眞黒くなつて、その下の皮の厚く剝けた所からは、赤い肉が痛々しげに現はれて、黒と赤の段だらになつてゐた。

アルコール濕疹に冐された、ペンキ職工の皮膚は赤紫にむくんで、小さな黒點がぼつ〳〵出來てゐた。鉛中毒者の齒齦は黒く縁取つたようになつて、ぐら〳〵にゆるんだ齒の不快さと、じく〳〵出て來る膿の惡臭を充分に思はせてゐた。

脾脫疽にかゝつた屠殺業者の、黄味がゝつて紫色に腫れた腕は、稍々透通つて見へはしないかと思ふ程張り切つてゐた。その皮膚の表には疣のように黒く縁どつて、頭の赤く剝けた腫物が、一面にうぢや〳〵並んでゐる。

座瘡に冐された晒職工の顔は眞に生氣なく蒼ざれて、赤い小いさな腫物が妙な色彩りを見せてゐる。然かも此の氣の毒な職工は、座瘡の爲に眼も全然つぶれてゐた。

燐中毒の爲に下顎を失つた職工の咽喉は、崩れて丸で形を失つてゐた。何の事はない、膓を抉り出された蟇の腹を開いたように、滅茶々々に爛れて肉が流れて了たので、咽喉の内壁はゴムの剝けた唧筒管のような段だらが現はれてゐる。

之等の模型は、明治四十三年に獨逸ドレスデンの博覽會に出品された物を、日本から出した物と交換したのだそうだ。然し此處に記した職業の凡てが、既に古くから日本でも經營されてゐる以上、必ずや此の種の職業病もそこゝにあるに違ひない。

そして尙茲に、最も注意して記憶しなければならない事は、職業病の凡ては慢性なる事である。何人も知れる如く、慢性病はその初めに當つて遽かに病狀を呈さず、そして體内に深く喰い込んだ病毒が稍々表面に現れて來る頃には、もう全癒の見込は無いのである。

由是觀之、多くの勞働者は、日々病毒に侵されつゝある事も心附かずに、僅かな金の爲め

に、命を縮めて勞力の切賣をしてゐるのだ。

僕は更に、勞働者の職業病に冒される數、及びその病質をも知りたかつたので、試驗所に某博士を訪ねた。然し博士の言に依れば、日本には未だ衞生統計などと云ふ文明的な物の無いは勿論、それについて政府當局者は些の注意をも拂つてゐないとの事であつた。

そこで轉じて、稍々此方面の統計に通じて居るといふ某氏を訪ねた。某氏の言に依れば現在日本で最も多くの勞働者を有する工業と云へば、纖維業即ち紡績、生絲、織物の五十萬、製鐵の十五六萬、別に鑛物業の約二十五萬だが、此の內の坑外作業員九萬は、鐵工に屬すべき者だと云つてゐる。其他の職工となると、至つて數が落ちるので現在ではまだ統計をとる迄に手が附けられてゐない。

で第一の纖維業者の職業病と云へば、綿屑を吸い込む結果起る呼吸器病である。が之れも工場の設備の整つた外國では、職業病として認められない程少數であるが、日本では第一に工場が不完全であり、次に寄宿舍の設備の不整頓の結果、實に驚くべき程多數の勞働者を年々斃死せしめてゐる。

日本の紡績工場の不完全は勿論であるが、最もよき傳染病の媒介者となるはその寄宿舍である。無茶苦茶に長い時間働いて疲れた職工の身體を養ぶ食物は、實に粗惡を極め、而して夜の寢具に至つては、一人に一組を與ふる寄宿舍は皆無と云つて好い。尠くも一組に二三人、多きは一組に六七人の職工を雜魚寢させる。加之、これ等の寢具には誰彼の區別無く、昨夜甲の組の寢た薄團に今夜は乙の組が寢る。おまけにその出入が烈しいから、一人病毒のある者があれば、到る所に毒菌をまき散らして傳染せしめるのである。之れが爲に纖維業職工の死亡率は一般國民の千分の三に對する千分の八以上の高位を示してゐる。現に五十萬の職工中一年の死亡者は約五千人であるそうだ。

鐵工は職業病と云つては別にないが、然し傷害の數は非常に多い。その傷害統計は商工局で調査してゐるが、兎に角塵埃、濕氣の息苦しい程立ち籠めて居る工場內に働く者にして、職業病と云ふ程特殊にならない迄も、身體を害せぬ筈無きは自明の理である。

十六萬餘の坑內從業者、即ち坑夫、堀工等は、洞窟中の暗黑の爲に貧血し、鑛脈母岩の微粉、カンテラの油煙、爆發藥の毒煙を吸入するが爲に、入坑後數年にして肺の彈力を失ふに至り從つて結核は容易に傳染せられる。よし結核に冒されない迄も、坑內作業に十四五年も從事すれば、よろけ即ち坑夫病となるを免れない。斯くて日夜黑い痰を吐き、身體は萃蛻のように血の氣が失せて、遂に仆れて了ふのである。故に坑夫の職業生命は、長くも二十年を出でないのが相場である。

從業員の數は餘り多くないが、職業病として最も顯著惡性なのは、燐寸職工の燐中毒である。燐寸の種類は黃燐燐寸、硫化燐々寸、安全燐寸等であるが、此の中では前二者が最も中毒が烈しい爲に、二三年前に、歐羅巴の中十ケ國程が協議して、黃燐、硫化燐々寸の製造禁止を決議したが、日本は遂に此の決議に加はらなかつた。

職工の作業にも調合、端塗、乾燥、箱詰、等の別はあるが、之れ亦前二者の害毒が最も甚だしい。調合端塗等に從事して、二三年乃至四五年を經過すれば、先づ齒齦炎を起して來る。斯くて齒が漸次脫落し初めた頃には、腐蝕は下顎骨に深く喰入つて、遂には下顎骨全體が腐れ落ちて了ふのである。下顎骨が無くなつて、それこそホントに飯を喰ふ事の出來なくなつた人間の餘命は、大抵知れてゐるではないか。

大阪病院の外科室には、燐中毒に冒された人の腐れ落ちた下顎骨が、大きな壜に保存してある。現在の燐寸從業員の數も殆んど知れてゐないが、燐寸製造業開始以來、如何に多くの燐中毒者を出したかは、此の壜詰の腐骨によつて證明される。

日本勞働運動史

荒畑寒村

一

世には、日本の勞働者は古來馴致された主從關係の美風に感化されて居て、彼の西洋に行はるゝ資本家對勞働者の『階級』といふが如き觀念は、到底その念頭に入り難きものである。既に『階級』の觀念が無いのであるから、豈安んぞ『階級鬪爭』の事實が現はれやうや。世界は勞働者革命の渦中に投ぜらるべし、日本のみは萬世無窮、主從枕を高うして眠るべきであると、痴人の夢を說くに類せる議論をして居る學者が少くない。而して彼の茅原華山の如き、また此の痴人組の隨一人である。

然し乍ら、事實のみは斷じて斯の如き不道理を承認しない。『歷史は階級鬪爭の記錄なり』とマルクスの道破せるが如く、勞働者はその未だ明かなる階級的意識を有せざる時に於てすら、否、その征服者を神ながらの主人と信じ、自己を永久の奴隸と信じて敢て怪しまざりし時に於てすら利害關係の相反せる團體に對しては、何等かの形式の下に不斷の鬪爭を行つて來たのである。日本に於ける勞働運動の歷史は、即ち實に階級鬪爭てふ事實の存在をば、最も雄辯に論證する者ではないか。彼の茅原華山其他片々屑々たる徒輩は、此の簡略無雜なる一篇の勞働運動史の前にすら、將に今後なま物識を振廻すを羞づべきである。

二

明治十三年初めて創立された自由黨、同十五年樽井藤吉氏等に依て肥前嶋原に起された『東洋社會黨』、何れも多少勞働問題に觸れた處はあるが、勞働運動と稱するものゝ初めて起されたのは、十六年故奧宮健之、伊藤仁太郎、栗原亮一、三浦鶴吉の諸氏が創立した『車界黨』と稱する團體が、東京市の車夫を糾合して鐵道馬車廢止を企圖せるに在るであらう。其後更に、二十一年に起つた高嶋炭坑の坑夫虐待事件、並に翌年橫濱に起つた西洋人の製茶工塲の勞働者小出事件等は、世間の注意を當時漸く勃興し來れる勞働問題に向はせた。されば二十三年九月德富蘇峰の『國民の友』は、社說として左の如き文字をすらも揭ぐるに至つた。

『――唯希ふ處は同業組合なるものを起し、之を以て互に一種の友愛協會となし、互に其收入金の幾分を貯蓄し、其組合中に疾病、火災其他の不幸に遭遇する者は、事實を探究して之を扶け、若しくは一旦事ある時に於ては、共同業團結して、罷工同盟を作すの用意を作すべし。――』

同誌は亦、ヘンリィ●ヂョーヂの論文の飜譯、故酒井雄三郎氏の論文『社會問題』、『五月一日の社會黨』等を揭げ、更にカアペンタア著『文明の弊及救治策』、『現時の社會主義』等をも出版した。

三

二十五年八月、大井憲太郎、柳內義之進氏等の『東洋自由黨』が起つたが、其政綱中には『勞働者保護』の一節があつた。同黨內には柳內氏を主任とせる『日本勞働協會』及び『普通選擧期成同盟會』設けられ、東京靴工協會はまつ先に『勞働協會』に加入した。『勞働協會』は、同年十二月陸軍省內に工長學舍と稱する物を設立して靴工を養成し從來一般の製造業者に託して製造させて居た陸軍省內の靴は、悉く之を工長學舍一手で請負はんとし、議會に請願する爲め靴工協會をして蓆旗を押立てゝ日比谷の原まで繰り出させなぞした。次で人力車夫の團結を圖らんが爲に洲崎の車夫なぞを說き、更に大工左官の組合を作らんとしたが何れも成功せず、また東洋自由黨の挫折した爲めこの運動も發達せずして止んだ。

四

活版界に於ける勞働運動の先覺は、明治十七年頃東京印刷會社の課長を勤めて居た池田某氏で、氏は活版工の組合を作らんとして盡瘁したが、勞働者の恐怖と誤解との爲に僅か二ヶ月にして止めて了つた。然し乍ら、二十二年跡部某氏が秀英舍長故佐久間貞一氏の援助の下に、活版工組合を創立しやうとした時は、秀英舍の職工は概むね之に應じた。然るに同舍以外の職工は却つて此の企圖を妨げ、黨を組んで秀英舍派の職工と爭ひ、果は腕力にさへ訴ふるに至つたので、此の運動もまた遂に失敗に歸した。さり乍ら、翌二十三年本多、深澤、直田の諸氏は同志會なるものを起して再び活版界に勞働運動を開始し、木挽町の厚生館にその總會を開くや、會衆實に千五百餘名と註せられた。惜むべし此の同志會も亦、委員等が徵收せる會費の使途を明らかにしなかつた爲め、解散するの止むを得ざるに至つた。

五

鐵工間に在りては、西洋鐵工の最古參者小澤兼藏、同國太郎、相田吉五郎の諸氏主唱して、鐵工組合組織の下相談をする爲め、明治二十年二月兩國井生村樓に懇親會を開きたる處、初めの中こそ眞面目な演說なぞもあつたが、中頃からは博奕が始まるやら、散會後は遊廓に繰込むやらの騷ぎに、これまた到頭失敗に歸した。超えて二十二年、前記の諸氏は再び運動を起し、六月に入つて玆に初めて『同盟進工組』の設立を見るに至つたのである。進工組の主なる目的は『積立金を蓄積して共同資本となし以て工場を設立する』に在つた。而して石川嶋造船所、陸軍造兵廠、海軍造兵廠、田中機械製造所、鐵道局等の鐵工之に屬し、甚だ有望なる將來を有したるにも拘はらず、委員等が積立金の一部を消費したといふ風說が盛んになつた爲め、委員等は積立金を分配し、竟に空しく解散して了つた。

六

二十七八年の日清戰爭は、日本の資本家制度に一段の進步發達を劃せるものであつた。彼の日露戰爭後に社會の實見せるが如き企業熱の勃興は、大工場の建設となり、賃銀

勞働者の激增となり、租稅の增徴となり、物價の騰貴となつた。物價は騰貴せりと雖も賃銀は之に比例して增加はせぬ、勞働者は闇黑裡に手探るが如く、此の困難なる境遇を脫れんとして努力したのである。果然！戰爭終了後一年を經たる明治三十年は、非常に同盟罷工の流行せる年であつて、隨つて勞働者は厭でも應でも團結の必要を覺らざるを得なかつた。同年七月五日勞働組合期成會の生れたる、豈この自覺に促がされたものでは無からう乎。

先是、明治二十三年當時米國で勞働せる傍ら、『職工義友會』を組織して勞働問題を研究せる高野、澤田、平野、武藤、木下、城等の諸氏は二十九年末に歸朝し、澤田、城の兩氏は翌年四月東京に『職工義友會』を起し、同業組合設立の爲に活潑なる運動を開始した。その『職工諸君に寄す』と題せる檄文の如きは、日本勞働運動史上に重要なる位置を占むる文書であつて、彼等は革命を排して急進的行動を斥けたが、猶且つ左の如く稱して居た。

『曾てはアメリカに於て十五萬人の無資無產の鐵道工夫は、八億餘萬弗の資本を存する二十四の鐵道會社を相手として三週間汽車の運轉を止めしめたる事あり。三萬人の小揚人夫は、三ケ月間英國倫敦市場に食物の缺乏を來さしめたる例しもあり』云々。

而して同業組合の組織は、即ち

一、一郡市內同業者七人以上なる職業者集まりて地方同業組合を設くべし。

二、一郡內に在る種々の同業組合聯合して地方聯合團を設くべし。

三、全國處々に在る地方同業組合聯合して全國同業聯合團を設くべし。

四、全國處々に在る全國同業聯合團を聯合して大日本同盟團を設くべし。

といふに在り、その目的は專ら組合員間の疾病、災厄、失業、老衰等を救濟するに在つた。

七

斯くて會員漸く增加して七十一名となつたので、七月初めてその發起會を開き、城、澤田、高野の三氏を假幹事に推した。而して八月には第一回月次會を開いて規約の修正役員の選擧等を行ひ、爾來每月二回以上、神田、日本橋、牛込、本所、深川、及び大宮、橫濱等に演說會を開いて勞働者の覺醒團結を促がした。その結果、期成會中の鐵工千百八十四名は鐵工組合を組織して、神田青年會館にその發會式を擧行し、その當日吾が國最初の勞働者の勞働雜誌たる『勞働世界』は、期成會の幹事片山潛氏に依て發刊された。見よ！期成會發會式後僅かに半歲、早くも約千二百の組合員を有する鐵工組合と、『勞働世界』といふ機關雜誌とを有するに至れるを。

八

三十一年三月、委員會は會員の親交を圖り勞働者の氣勢を昂めんが爲め、上野公園に運動會を催ほす事を決議した。

その規律は嚴正、その用意は周到、眞に模範的の集會なるにも拘はらず、警察は內諭して中止せしめんとした。然し乍ら委員は惟へらく、幾千人の勞働者が列を組んで市中を練り步くから止められもすれ、若し勞働者が三々伍々上野公園に集まつて、花見がてら運動會を催ほすに何の差支へもあるべき筈が無いと。そこで諸般の準備も整へた上、口頭で警察へ四月三日運動會擧行の旨を屆け出でた處、霹靂一聲、突如として禁止の命が下つた。運動會は斯くして禁ぜられたが、十日は恰かも奠都三十年祭だつたので、委員長片山潛氏は八百餘名の會員を引率し、進行歌を歌ひつゝ上野公園に赴むいて歡を盡した。

九

三十一年も亦、頻々として同盟罷工所在相次ぎ、就中、日本鐵道機關方、王子製紙會社職工、新潟沖合船大工、富岡製絲工女、白河製絲工女、九州鐵道電信方、府下形付職工、鶉沛セメント會社人夫、深川活版工、佐賀煙草刻職工、岡山煙草刻職工等の同盟罷工は、最も有名なるものであつた。

此の勞働界不穩の間に在つて、七月勞働組合期成會は、小笠原、高橋、高野、片山の諸氏を派して東北遊說の事に從はせた。而して是が結果、一の關、盛岡、尻內、青森、仙臺等の矯正會員（日本鐵道機關手の團體）をして深く期成會に同情せしむると共に、鐵工組合の支部をば青森に二十五、盛岡に二十六創立せしめ、更に福嶋、仙臺、宇都宮等の同支部員の氣勢を昂めしめた。三十二年七月片山潛氏は單身第二回東北遊說に從ひ、黑磯、福嶋、仙臺、一の關盛岡、尻內、青森、札幌、旭川、原町、平、水戶の各地を歷訪し、到る處の矯正會員と會しては期成會と合同の必要を說いた。また關西遊說には、同年高野房太郎氏が神戶に赴むける外、城、間見江の兩氏は神戶大阪等に在つて熱心に運動した。

十

先是、明治二十九年の末、農商工高等會議開かるゝや、その諮問案中に『職工の取締及び保護に關する件』あり、添田主稅局長、金子農商務次官、安藤商工局長等は熱心に之を主張したが時期尙早として繼續委員に引渡されて了つた。然し農商務省高等官は翌年既に職工條例制定の省議を一決せんとしたが、端無く大臣及び次官の辭職に會して再び葬むられた。斯くて三十一年の夏、政府の工場法案を農工商高等會議の諮問に附するに先だち、全國商業取引所の諮問に附した。

期成會は九月月次會を開いて陳情委員を選び、工場法案に對する修正意見を定め、横濱に、神田に對工場法案演說會を開き、農商務大臣、同局長、內務大臣、農工商高等會議員、商業會議所員等を歷訪して陳情する處があつた。而して全國商業會議所中、原案に贊成せるものは僅かに七ヶ所、工場規定のみに修正せしもの十ヶ所、否決せるもの十九ヶ所であつた爲め、期成會は益々同法案の運命を憂ひ根

氣よく訪問を續くると共に、或は請願書を提出し、或は十一月三日示威運動を催ほさんとしたが警察の爲に禁ぜられた。幸にして農工商高等會議は原案に修正を加へ適用の範圍を擴めて之を許可したるにも拘はらず、政府は此の決議を握り潰して竟に議會に提出しなかつた。

十一

期成會は新組合の設立に努力すると共に、既設組合に對する援助をも怠らなかつた。即ち三十年七月の第二回演説會以來、期成會は絶えず活版工を教育奬勵し、三十一年三月本所深川兩區の活版工百餘名が活版工同志懇話會の發會式を擧ぐるや、期成會は高野片山の兩幹事を派して之を賀せしめた。更に發起者七名が資本家の悍かる處となつて解雇せられ、爲に會員全體が同盟罷工を企つるに及んで深く之に同情を表し『勞働世界』は大に資本家の行爲を非難痛撃した。而して一旦潰された懇話會の再興するや、期成會は絶えず奬勵鼓舞を與へ、次で活版工組合成るに到つてその主義の懸隔はやゝ兩者の間を遠ざけたが、同組合衰へて誠友會之に替るに及びまた次第に近づいて往つた。

三十一年二月日本鐵道機關手八百餘名の同盟罷工を企つるや、期成會及び『勞働世界』は滿腔の同情を寄せた。而して機關手側が勝利を得て矯正會を組織してからは、期成會は二回の東北遊説員を送つて兩者の合同を圖るに努めたが、之は不幸にして矯正會大會の否決する處となり了つた三十二年八月東京馬車鐵道の馭者車掌間に、會社に請願して解雇された者があつた時、期成會は會員に向つて解雇者援助の爲に寄附金を爲すべきを勸告し、次で起つた『市内鐵道馬車馭者車掌組合期成會』が、會社の爲に潰されんとするや、期成會は兩者の間に介して調停を試みんとするの決議をなした。

其他、東京鑪製造業組合、石版印刷職員組合、東京船大工職工組合、東京雛人形組合等に對しても、期成會はまた相當の同情と援助とを與へた。

十二

三十三年三月、治安警察法發布せらるゝに及び、期成會は斷然として起つて反對運動を試みた。蓋し治安警察法なるものは、彼の國會開設の前後に當つて、政府が民間の國會開設運動家を壓服せんが爲に設けたる保安條例の變體であつて、就中勞働運動に關する左の條々は、彼の佛蘭西大革命後に制定されたるラ、シャプリエ法と同じく、殆んど勞働運動の咽喉を扼してその死命を制するものである。即ち曰く、

『左の各號の目的を以て他に對して暴行若くは公然誹毀し又は第二號の目的を以て他人を誘惑若くは煽動する者は一月以上六月以下の禁錮に處し三圓以上卅圓以下の罰金を附加す。使用者の同盟解雇又は勞働者同盟罷業に加盟せざる者に對して暴行し脅迫し若くは公然誹毀する者亦同じ。

一、勞務の條件又は報酬に關し協同の行動を爲すべき團結に加入せしめ或は其加入を妨ぐること。

二、同盟解雇若くは同盟罷業を遂行する爲め使用者をして勞務者を解雇せしめ若くは勞務に從事するの申込を拒絶せしめ又は勞務者をして勞務を停廢せしめ若くは雇傭するの申込を拒絶せしむること。

三、勞務の條件、又は報酬に關し、相手方の承諾を强ゆること。』

即ち期成會は之を以て勞働者の團結を禁じ、同盟罷工を罰するものなりとし、片山潛、外山榮次、高橋定吉の三氏を訪問委員に選んで、警保局長、警視總監、商工局長等を歴訪して反對意見を陳情せしめた。『勞働世界』また盛んにその非理不法を論じて息まなかつたが、不幸にして遂に同法は發布されて今日に至つて居る。

期成會は三十年末には千二百餘名、三十一年末には三千餘名、三十二年中には五千七百餘名の會員を有するに至つたが、三十三年に入つては非常に衰へた。

十三

是れ日本に於ける勞働運動の概狀である。吾等は千波萬波の起き伏すが如くにも、時世に應じ周圍に應じて興りては仆るゝ幾多の勞働團體を見る。而してその根幹主潮を作せる勞働組合期成會が、幾多の枝葉細流を合して、堂々として世界的大運動に對つて進み往くの、崇高嚴肅なる大偉觀に打たれるのである。

實に彼等は興り、仆れ、而して滅び去つた。また勞働者は無知であつた。その爲に彼等は勞働運動を誤解し、運動者も妨害し、吾れと吾が利益を破壞した。また勞働運動家自身、不眞面目なる者も少なからず、或は金錢問題の爲に勞働者をして失望離散せしめ、或は勞働運動を以て立身出世の階梯となした。而して少しく眞面目にして熱心なる勞働運動者があれば、資本家は利を啗はして軟化せしめるか、解雇放逐を以て脅かして屈服させた。殊に治安警察法の發布以後、勞働者が全く絶望したのと、社會主義者に對する政府の迫害との爲に、勞働運動は久しく火の消えたるが如き狀勢に在つた。然れ共、勞働運動は死滅したのでは無い、彼の火山は只だ休息して居るだけだ。そして時として、彼の足尾、夕張、別子等の各鑛山に於ける暴動、東京街鐵の罷工等の如き、間歇的な噴火を爲すに止まつた。

果然！　昨年に至つて、吾等は突如として東京市内の石工及び大工職が、各職業組合を作れるの報に接した。固より是等組合の組織性質は、勞働者の戰鬪團體に非ずして單に相互救濟の機關たるに過ぎないが、然も久しく空白に止まつて居た勞働運動史の上に、卒然として一抹の墨色を印し來れる點に於て、吾等は甚大なる興味を感ずるのである。誰れか勞働者に發意の力無く、創造の力無しと云ふ。彼等は學者、資本家、爲政者の助力忠告援護を藉らず、只だその生存上の必要に促迫せられて、或は共濟の機關を、或は防衛の機關を形作るのである。故に更にその境遇が之を要求するならば、彼等は又攻戰的なる團體を形作るであらう。吾等は希望と確信とを以て其日の到來を待ち、そして熱情と努力とを以て之が實現に盡さんと欲する。

所謂新軍國主義

榮

ピヨトル・クラポオトキンは、今回の戰爭に於て若しあの軍國主義の獨逸が勝利を得るやうな事があつたら、世界の文明は正に五十年の逆戻りをしなければならぬと云つて、平素の絶對的非國際戰爭論を徹回して、熱心に獨逸征討論を說いてゐる。

しかし文明の逆戻りは、あながちに、獨逸の勝利からのみ來るのではない。國際戰爭其者が、既に、文明の退步、若しくは少なくとも一時的中止を來たさしめるのである。そして僕は、クラポオトキンの獨逸征討論其者を以て、此の戰爭の影響に成る彼れ自身の退步だと思つてゐる。此の退步は、歐羅巴に於ける各交戰國の、殆んど有らゆる思想家共にも見られる。

と云ふやうな見出しで、次に山田檳榔氏の『軍國主義の新提唱』(太陽九月號所載)の批評に移るとなると、檳榔氏をも一とかどの思想家扱ひをするやうな甚だ不本意な形式になるのであるが、僕が決してそんな不心得を抱いてゐるものでない事だけは、あらかじめお斷りして置く。

今日の戰爭の矢張り交戰國の一つたる我が日本に於ても、尤もほんの名だけと云つてもいゝ程の交戰國であるだけ、それだけ其の影響は少ないやうでもあるが、兎も角も此の退步がちよい〳〵と見受けられる、殊に獨逸の景氣の善ささうになつてからは、それが切りに頭をもち上げて來た。中澤臨川氏の武侠主義、田中王堂氏の新帝國主義、茅原華山氏の何とやら主義等は、思想上の此の退步の數例である。そして其の事實上の最近の好例は所謂青年團の改善である。

九月十五日、內務文部の兩省は陸軍省の提案を容れて、兩省大臣の連署を以て青年團改善の訓令を發した。即ち政府者は、七歲から十三歲までの小學校と、廿一歲から廿三四歲までの兵役と、更に廿四五歲以上からの在鄉軍人團と、及び其他の組織せられたる若しくは組織せられざる軍國主義的敎育に慊らずして、更に十四歲以上廿歲までの有らゆる少年の軍國主義的組織と敎育とを完成しようとするのだ。そして內務文部兩省が列擧した、地方青年團の陷り易き五箇の弊害の中、最後の『思潮の侵蝕』の件、即ち急變せる時代思潮が青年の血氣を侵蝕するに對して特に指導者の注意を要すとあるのは、實に特に吾々文明批評家の注意を要する事ではあるまいか。

僕は、此の政府者の要求が、國家に須要な何とかを養成する帝國大學出身の新進文學士山田檳榔氏によつて相呼應されてゐる事を、大した不思議とも思はない。檳榔氏は、其の家庭から小學校、中學校、高等學校、そして最後に大學までの、永年の所謂軍國主義的敎育の下に育つて來た人である。彼れの軍國主義的精神が、世界の大戰亂と云ふ途方もない大きなテコによつて、狂亂的に昂騰されたのは、寧ろ當然の事である。

先づ檳榔氏が、政府者の所謂『思潮の侵蝕』に對して、如何に悲憤してゐるかを見よ。

『近時我が國民の國家に對する觀念が著しく減退せる事は痛嘆すべきである。……今日流行する所の思想は、個人主義的に非ざれば社會主義的、享樂主義的に非ざれば功利主義的、而して一人の起つて國家主義を高唱し尙武、誠忠の思想を新しき意義に於て主張するものなきは、確かに我が思想界の一大缺陷である。今の新しき青年には、國家の觀念は殆んど皆無であると言つても過言ではない。忠君愛國は之れを陳腐の說と爲し、……比較的頭腦明敏なる青年は相率ゐて危險なる迷說に趨り、唯だ魯鈍なる壘守の徒によつて、眞に舊き儘の生命なき國家思想が傳襲せられてゐるのは、洵に危惧の至りではないか。吾等とても、陳套にして低卑なる悲歌慷慨の喧噪と輕妄とには、倦厭を感じてゐる。盲目的に國家を押賣する老骨の御談義にも當惑を感じてゐる。然れども斯くの如き國家思想の冐

讀者あるの故を以て、主要なる國家觀念の本質をまでも否定し去らうとするのは、甚だしき早計であり、本末幹枝を辯ぜざる蒙昧である。今や實に新しきシステムに於ける新帝國主義、新軍國主義の起る可き絶好時機に際會してゐる。』

流石に時代の人として矢張り多少は時代の思潮に侵蝕されてゐる彼れは、舊來のまゝのものでは滿足が出來ず、更は新意義の帝國主義、軍國主義を提唱しようと云ふのである。冒頭のこれだけの言葉を聞いたゞけでは、敵ながらもあつぱれ好漢！と、打ち囃しても見たくなる。然らば其の『新しきシステムに於ける新帝國主義、新軍國主義』とは、果してどんなものか。

實の所僕は、檟椰氏から國家の性質に就いての新見解を拜聽する事が出來るものと、うつかり一寸思つた。氏の云ふが如く、今の新しい青年が國家の觀念に殆んど皆無であり、忠君愛國を以て陳腐の說と爲し、そして殊に比較的頭腦明敏なる青年が相率ゐて危險なる迷說に趨るのは、此の國家共者の性質に就いて、又其の從來敎へられた見解に就いて、無意識的の若しくは意識的の疑惑があるからである。更に進んでは、國家の眞意義を、嘗て敎へられた事のない方面に發見して、却つて國家共者に反逆せんとする確信があるからである。此の疑惑と此の確信とを打破しない限り、若しくは國家是認の更に新しき眞意義を提供せざる限り、檟椰氏の企圖は遂に失敗である、物笑ひの種子である。

殊に今日の比較的頭腦明敏な青年の、國家に對する疑惑若しくは非認は、其の實生活の上からの個人對國家の問題、更に引いては個人間對國家間の問題から出發する。然るに檟椰氏は、先きの國家共者の內容的性質に就いても、又此の個人對國家の問題に就いても、遂に一言の說く所なく、そして最後の個人間對國家間の問題に就いて、僅かに次の如く云つてゐるに過ぎない。

『人間生活の今日の狀態にあつて、個人間に於けるが如き意味に於て國際道德を維持せんとする希望は、畢竟空想に過ぎぬ。……國家は夫れ自體、至上存在、最高道德、絕對價値である。』

此の『今日の狀態の下にあつて』と云ふ文字は、更に明日を假想した發想である、此の發想の中には、個人間の道德と國家間の道德とが、明日に於て、何れかゞ他の一方を征服し若しくは兩者相共に融合すべき事の可能性が含まれてゐる。然らば明日其の何れが勝ち又如何なる狀態に於て其の兩者が融合するのか。それとも何れを勝たせなければならず、又如何にして兩者を融合させなければならぬのか。國家共者の內容的性質を少しも說いてゐない彼れに、此の答の出來る筈はない。そして直ちに彼れは『國家は夫れ自體』云々の、獨りごとを歌つてゐる。

檟椰氏の議論の全體は、すべて此の調子である。彼れは、國家共者の何等の內容的意義を闡明する事なく、直ちに國家の至上存在、絕對價値を、只だ聲高く囀つてゐるに過ぎない。即ち彼れ自身が『當惑を感じてゐる』と云ふ、『盲目的に國家を押賣りする』、しかも老骨ではなくして若骨の御談義である。『唯だ魯鈍なる壘守の徒』の、『眞に舊き儘の、生命なき國家思想の傳襲』である。又彼れ自身が『嫌厭を感ずる』と云ふ、『陳套にして低卑なる悲歌慷慨の喧噪と輕妄と』である。新しきシステムの新帝國主義も、新軍國主義もへちまもあつたものぢやない。

最後に僕は、軍國主義を拒否せんとするものが、何故に『偶々以て彼れ自身、近代國家發達の歷史に對する彼れ自身の無知無識を告白するものである』かを、又マキアベリ以來の國家論が如何に『自然に』そして『合理的』に發達し來たつたかを、即ち檟椰氏自身の近世國家及び近世國家論の發達史觀を、是非とも國家の爲めに發表せられん事を希ふ。出來ると思ふならやつてみるがいゝ。正に天下のおなぐさみであらうよ。

兵役自殺更生

齋藤　惠

『先日は失禮致しました』など、云ふ月並はよして、直ぐに私の申上げたいと思ふ事を書き出します。それは他の事ではありません。只だ私の眞實の告白を聞いて頂きたいのであります。

最初先生を御訪問致しましたのは先月の廿日でありました。お忙しい處に御邪魔してゐるのが心無い様に思はれましたから何も御談せずに歸りました。それから再び先生を御尋ね致しましたのは、二十五日以後は暇になると云ふのを二十五日からは暇になると云ふのと感違ひして居りましたので、二十五日に御伺ひしました。實は先生と御逢し得る日の一番早いのを選んだので、待ち兼ねて御尋ね致したのでありました。

それ以來私は自分の淺間敷さ、意氣地なさに堪へられないのです。其時に私の先生に申し上げたことや、御尋ね致したこと、又其時の私の態度の全ては虚僞でありました。初め電車に乘つた時、今日こそは先生に丈けは思ふ存分に申し上げて見やうと心に決めたのでありました。それが二十年間毎日の様にやつた常習性の爲めに無慘に破られて了つたのでありました。心にもないことばかり申し上げました。其時既に自殺を決心してゐた私が、先づ第一に、私はどうしても死ねない、私は生きてゐるんですから生きられる丈けは生を續けたいと申しました。

又話の主題であつた兵役の事に就いては實際に苦しんでゐました。先生に申し上げた樣に採られてしまふまでは冷淡に知らずに居つた程自分のことに間が拔けて居られ樣筈がないのであります。これは三年以來の苦惱でありました。何んとかして各自持つて生れた能力を最も完全に發揮し得る世界を得たいと思つてゐる私が、愚にもつかない○○とか云ふ者の下に各自の個性を蹂躙して了ふ怖しい力が刻々と迫まり來ることを知らずに、ぼんやりして居られませうか。

私は宗教の薄衣をかむつて誤魔かさうかとも思ひましたが、極端な自由を理想として、只夢のやうにそれを欣求してゐた私は、遂に甘い誘はれに依つて、死を決心しました。自殺、これが私の進む可き唯一の道でありました。しかし容易にそれを斷行し得ませんでした。最初の間は死其の者よりも死骸が心配でした。其次ぎには如何にして死すべきかが氣掛りでありました。縊死や水死は厭なことだと思つてゐました。死骸をかくし得る所から火山もよいと思ひました。放浪的な性質を有つてゐる私は、彷徨の果て何處の野、何處の原に行倒れるのもよいと思ひました。又微塵に骨肉の飛散するダイナマイトの死も心よいと思ひました。モルヒ子、短刀――ピストル――と樣々に考へました。そして私は、自殺は自分で自由に死の方法を選び得ることが心強く思はれて、大層安心されました。

私の今度の出京は其の決行の爲めでありました。私の幻想は死をローマンチック化しました。其の決行の場所は房總の海もよいと思ひました。あやめ咲く眞菰の生ひ茂げる水郷も、私の死の舞臺として不足はないと思ひました。私の行程に登つたのは十九日でありました。私は此の時にどうせ斯く決行するに至つたのだから死のせめてもの慰安の爲めに、永い間理解し得ずに苦しんだ自分と云ふものを少しでも解釋して見やうと思つて、其の理解を助けて貰らはうとして多くの人々を訪問しました。突然に先生を邪魔申上げたのも其の爲めでありました。其の癖、自分では噓ばつかり言つて歩いて、人からは眞實の事を得やうとしました。

私の短い過去の二十年は幻影を生命として生きて來て居ります。私は幻影の中に死んで行きたいと思ひました。芝居も出來る丈け贅澤な席で見て歩きました。銀座の紫がかつた黄昏れも散歩しました。上野の森も目黑の雑木林も彷徨いました。二十五日に先生の處を

御暇してから、六時の汽車では出立たずに有樂座のマグダを見ました。それから電車で上野の停車場に參りましたのは一時半頃でした。時間表を見ますと十一時に立つ靑森行きがありましたから、私は古河までの切符を求めました。それは古河から利根川の河畔を彷徨ふて、永い間夢の樣に美しく想像をしてゐた水鄕に出るつもりでした。名を聞く丈けでも、私には、潮來や出嶋は好な處であります。

　夢中で車室に入りました。旅客は三四人丈けでありました。汽車はすぐ走り出しました。そして田端の邊であつた思ひます。薄ほんのりと明い東京の空を顧りました時、イリュウジョンの滅び行く樣な氣がして、急に寂しくなりました。遺る瀨なさに泣かずには居られませんでした。程なく武藏野に出でました。平野の暗闇を劈いて走るので、車輪の音は一層大きく物凄く聞かれました。私は怖しい樣な氣がして古河に降りずに了いました。宇都宮まで參りました。さうしてひとり寂しく宿屋に宿まつて夜具にうづくまつて思ふ存分に泣きました。

　翌日一番で日光へ參りました。もう心は左程騷ぎませんでした。しかし何んにも知らない處に斯うして行く氣持ちは餘りよいものではありませんでした。死んだ先きも斯んなものだらうかなど丶思ふと堪へられませんでした。中禪寺に着いたのは十時頃でした。湖畔の景色は死の方へ一歩一歩歩みつゝある私を滿足させるに充分でありました。そして私は勸められるまゝに晝の食事を認めて、死の瀧の方へ心指して參りました。けれども警戒が嚴重であつた爲め果し得ませんでした。瀧壺にも參りましたが茶屋などあつた爲めに駄目でした。私は世の中の人々と云ふものは此の世以外に光明を認めて死んで行かうとするものに「どうしてそれを妨げる權利と必要があるのか」と疑ひました。何にも其人達から一瞬間であらうとも生を强ひられるには及ばない事だと思ひました。けれども私は爭ふ可き事でもないと思ひましたから溫和しく山を下りました。それは自分の死ぬ處は瀧とばかり限つたことでもあるまいと思つたからでありました。山の中頃まで來た時に崖を辿つて山深く姿を隱しました。もう夕暮でした。高い崖に立つて漸く死に得るんだと思つた時は言ひ知れない氣に襲はれました。始めて自分け死の門前に立つたのだと意識した時は、窮して死ぬのではない强い憧憬があつて死ぬるのだと思ひ乍らも、快くはありませんでした。私はダヌンチオの『死の勝利』を想起しました。又サアニンか誰れだかの死んだのに『此の世から馬鹿が一人死んだ丈けだ』と言つたことなど思つては自分がそれである樣に思はれて涙が頬につたひました。そればかりでなく、生れてから以來記憶にあること思ひ出せることは一種の幻影の樣に、一つ一つ鮮明りと浮び出でました。さうして私は崖から飛び込みました。足の離れた時は此の世の意識は失つてゐました。

　それが世間普通の言葉で言へば運がよかつたのでせう。私から言へば目的が達せられなかつたのです。生き返へされたのです。身體も少し壞しました。それでもこれから生き行くには充分です。

　私はこれからは生きてゐやうと思ひます。私はその爲めにこゝろよく働ける仕事を見付け樣としました。さうして選んだのは先生の御歩みになつてゐる道です。私には其れ以外に生きて行く方法を發見し得ないのであります。現在の○○○○を悉く　○して理想的）○○の社會を建設しやうとする運動より他には、滿足して愉快に働き得る仕事はないのであります。先生どうぞ强い決心を以て御願ひ致しますのでありますから進む可き此の道に對して御敎示と御指圖を賜りたいのであります。もう身體の痛苦が堪まりませんからよさして頂きます。打つたのは右の方の頭、顏、肩、腕、兩膝であります。

——十月十日——

避姙と墮胎

宮嶋麗子

　近頃靑鞜社の人達の間に大分喧ましく避姙墮胎問題が取扱はれてゐる。私は新らしく此問題を喚び起す因となつた原田皐月氏の小說『獄中の女より男へ』（靑踏六月號所載）と同じ號の伊藤野枝氏の感想と、以上二氏の思想を批評して更らに氏自身のそれを披瀝した、らいてう氏の論文『個人としての生活と性としての生活との間に於る爭闘に就て』（同上九月號所載）及び山田わか氏の『墮胎に就て』を讀んで略諸氏のそれに關する意見を識る事が出來た。以上諸氏の所論の槪略を言へば、原田氏は墮胎を是認し、伊藤氏は避姙を肯定して墮胎を否定し、らいてう氏はその何れをも承認し、山田氏は其何れをも否認するのみならず、親として子供を育てるに適した時期以前の結婚をも否認してゐる。然してらいてう氏を除いた他の諸氏は、避姙墮胎の原因を全て貧困—生活難に歸してゐる、らいてう氏は貧困以外にもつと內的な或る理由の存する事を主張してゐる。が諸氏はそれ等の理由の根本的原因に就て、何等考察するところなく、其解決法に關して、何等の考慮をも費やしてゐない。

　今日のやや自覺した婦人が其實生活の上に於て何よりも苦痛を感ずる點は、上述の問題に對してらいてう氏が、最も主要な、最も解決し難き問題として論じてゐる、個人としての生活と性としての生活との間の矛盾であり爭闘である。らいてう氏は斯う言つてゐる。

　『ほんとうに私達の今日の生活ほど多くのデイレンマの上にあるものはないでせうね。そりや男子の生活の上にでも定めて多くの矛盾爭闘があることでせう。今ちよつと考へてみた丈でも妻子家族を扶養する生活費を得るための勞働と、その人自身の人間としての、または個人としての魂の生活が營む仕事との間の矛盾位はすぐ想像することが出來ますもの。併し自分自身の仕事や硏究と生計のための職業との外になほ一方で、愛の生活を營むものとして家庭をつくり、子を產み、子を育てやらうとする婦人の生活に比較すればどうでせう。あなたは私が何時も子供を怖れ且つ避けてゐたことは御存じでせうね。併しそこには私としての相當の理由があつたのでした。今その主なものをあげれば、第一、現在の自分にとつて何と言つても一番大切なことは自分自身を教養し、人間としてのまた個性あるものとしての內生活を築くことである、そしてそのためには出來る丈多くの、そして落付いた思索の時間と勉強の時間と、仕事の時間と、又それらに注ぐべき出來る丈多くの力とが欲しくもあり、必要でもあつたこと。』

　らいてう氏の言ふ通り、男子の生活にも矛盾がある、婦人の生活にはより一層の矛盾がさ、それでは何故私達は、一個の人間としてのまた個性あるものとしての內生活を築くために、落ついた思索の時間と、勉強の時間と、仕事の時間とを、適度に有つ事が出來ないのだらう？らいてう氏は人のもち得る時間と精力には元來制限がある、だから人は同時に二つ若くは二つ以上の事に魂のすべてを與へる事は出來ないと言つてゐる。では何うしても、人は食べるための仕事と、魂の仕事とを、同時に有つ事は出來ないのだらうか。若しもさうとするならば、全人類を二種に分つて、其一方は全心全力を盡して生產に從事し一方は全心全力を盡して魂の仕事に從事しなければならない事になる。

　亦らいてう氏は、墮胎の原因を全然生活難に歸した原田氏や伊藤氏の言を評して、次のやうに言つてゐる。

　『果しておふたりはほんとうに「性」としての婦人の生活—種族に對する婦人の天職—と「個人」としての婦人の自分自身の生活との間の矛盾衝突には左樣苦しんでゐられなかつたものなのでせうか。個人としての自覺なく、自分自身としての生活といふべきものを少しもまだもつてゐない在來の又は一般の日本婦

人なら知らず、また何の教養もない食べるといふ事が生きることの全部である所謂下層社會の勞働婦人なら知らず、おふたりの如き婦人の上にこの種の爭鬪を見ないのは私には却て不思議に感ぜられます。……… 併しなほ矢張り私は貧困に基く不安の外に、否それ以上の不安として、個人としての自身の生活の向上發展を、自分自身の教養を妨げやしまいかといふことを忘れることは出來ません。もしまた私がこの上、敎師とか、新聞雜誌記者とか、醫者とかいふやうな職業的な又は社會的な所謂公生涯なるものを有つてゐたとしたら、またこの方面に於て屹度今一つの抵觸を經驗しなければならなかつたことでせう。』

勿論現在の社會に於て、女性が、全く自由な一個の人間として、自分自身の內生活を建設するために全力を傾倒するといふ事は、到底出來ない事である、其處に深い苦悶がある例へ自分ばかりが何等かの方法に由つて此困難を除却し得たとしても、なほ同性の全部が其矛盾爭鬪の生活の中に棲んでゐると言ふ事實を、何うする事も出來ないのである。らいてう氏は、果して其言ふやうに、此矛盾に事しむものは、自覺あり教養ある魂の仕事を有つた婦人のみであるとして、彼等を氏の所謂無知な、食べる事が生活の全部である、下層社會の勞働婦人から區別して考へられるのだらうか？而して氏は、下層社會の勞働婦人は自ら好んで食べる事が生活の全部である、獸に近い生活を營んでゐるのだと思つて、安んじてゐられるのだらうか？

人間としての女性の、個人としての生活と自然に運命づけられた、性としての生活との間の矛盾や爭鬪は、竟に調和統一の途を得られないものだらうか？私はさうは思はない、それは遣り方一つで何うにでも解決のつく問題であると信じる。或る論者は、婦人が個人としての自己の道に生きるためには、其個人としての生活と性としての生活との、二つの中の一つを選ばねばならぬと言つてゐる、が何故に女性のみが、個人としての生活を確立するためには、人間として自然に具有してゐる本能を虐げ抑壓して、不自然な生き方をしなければならないのか？若し母たる事が個人としての婦人の生活を沒却するものであるから、魂のための仕事を有つた婦人は母たる事が出來ないとしたら、誰が母となつて種族の保存―人類の向上伸展のために働くのだらう

山田氏の言ふやうに物質的に親としての資格を具備しない以上結婚してはいけないと言ふ事になつたら、若し一生さうした資格の得られない人は、働いても働いても滿足に食べる事すら出來ない今日の大多數の勞働階級の人達は、一生獨身で山田氏の所謂禁欲生活で其生涯を貫かねばならない事になる。氏は眞面目にこんな事を考へて本氣で言つてゐるのだらうか？

何故私達の生活の上にはこんな矛盾や爭鬪があるのだらう？私達は先づそれを明らかにしなければならぬ。

共產時代の原始婦人は、男子とひとしく、自然以外の何ものにも拘束されない、最も自由な活潑な生活を營んでゐた。彼等は自由戀愛の實行者であつた。彼等は彼等の本能性を充足させた結果として私生兒を生んでも、社會は何の制裁をも彼等に加へなかつた。彼等は不自然な方法を用ひて避姙や墮胎をする要がなかつた。彼等は自然のまゝに、最も自由に生きてゐたのだ。

不自然な制度の下に生きてゐる今日の私達は、私達の勞力に對して正當に酬はれてゐない、だから生活難が起る、避姙だの墮胎だのと言ふ不自然な事もしなければならなくなる全ての醜惡は、すべての罪惡は、現存の謬つた社會組織が、强ひて人に犯させるのだ。婦人が眞に解放された自由な正しい生活をなし得る時は、今日の社會制度が根本から變革されて、全く新らしい基礎の上に立つた、新らしい世界の現出した時でなければならぬ。其時全ての矛盾は取除かれ、全ての疑問は解決されるだらう！

茅原華山君の 階級論

山川均

一

『第三帝國』の諸論文の中には、日本に階級なしといふことが華山君に依て力說せられてある。華山君の所論には(一)日本には階級の區別がない。だから(二)階級間の鬪爭もない。(三)『强て階級の區別を作り、』『階級の競爭を挑發』せざる限り將來と雖も有りやう筈がない。是れ(四)歐羅巴の產業心理は歐羅巴人の社會と歷史とに特有なものであつて、日本人には溫情主義てふ特殊の勞働心理が備はつてあるからだ。從て日本人には『社會主義の發生す可き生活も境遇』もない。ザットこれ程の意味が明言され、若くば含蓄せられていると思ふ。尙華山君は此の主張を大きな一つの土臺『日本の歷史と歐羅巴の歷史とは殆ど全く無交涉で』日本の社會組織は根柢から歐洲のそれと違ふといふ思想の上に置いている。

日本の社會に實存する經濟的階級の自覺から生れた社會主義があり、社會主義者があることは――華山君には御迷惑とも――爭ふことの出來ない事實である。華山君が日本には『社會主義を發生す可き生活も境遇もない』から社會主義の起らぬと云はれたのは、社會主義てふ思想の或特殊な生活と境遇とを前提として、必然に伴隨する――即ち思想と其根柢に橫はる物質生活との關係に就ての吾々社會主義者の見解に裏書せられたものであつて、若し日本に社會主義者があると云ふことを肯定するならば、華山君は同時に日本の社會に、社會主義を發生す可き境遇、即ち歐洲の社會に共通な階級生活の存立を肯定しなければならぬ羽目に立つのである。

斯の如く日本の社會主義の默殺は華山君に取ての必要である。日本の社會主義の發生が、歐洲思想との觸接によつて速められたことは、事實である。けれ共日本の勞働者に社會主義を創發す可き生活がなく、心理がないと思ふのは、畢竟階級的理解のない證據である。嘗て歐羅巴の町人閥の慣用手段であつた社會主義的勢力の默殺といふことが、此處でも町人閥の思想家に依て襲踏せられるなら、沒交涉なるべき筈の東西歷史に此處でも偶然の一致のあることを見る。『少しばかりの生活難』をしか感せずに日本の社會に生存し得る『階級』に籍を置くことが、即ち華山君ばかりでなく、勞働階級に對して無理解なる凡ての町人閥の心理を作つている。

二

華山君が日本に階級なしと云はれる其階級とは一體何なものか。『歐洲に於ては帝王が歐洲全體に於て一階級を爲している……帝王は唯帝王との間に於て通婚している、各階級に於ても亦此事實がある……日本に於ては階級の血が互に通じている、故に階級間の理

解があり、從て同情がある』之が華山君の目指される階級である。して見れば華山君の問題とせられる階級とは、血族的世襲的のもので、歷史的の硬い鑄型に嵌つたものである。恐く日本の侍と町人以上のもの、印度人のケーストの如きものでなければならぬ。

此意味での階級といふものは、成程日本では華山君の擧げられた新平民があるばかりである。それなら西洋には之に當嵌る可き階級の區別があるか。ロシヤには農族から上の五ツの階級があつて、略々華山君の條件を充たすに足るものがある。けれ共現代の歐羅巴で、階級闘爭と云ふ言葉に含まれている階級なるものは、血族的世襲的の拔差のならぬ硬化したものではない。近代の經濟生活は、西洋にあつても日本にあつても、反て此意味に於ての階級を打破し、若くは其硬さを弱めたといふのが事實である。特殊な『日本心理』を存ずる所に、何故侍と町人の階級が出來たか、而して此硬い階級組織が何故崩れたか。之を説明するものは唯だ社會組織、經濟組織の變革といふ一事である。新き經濟組織と共に新い經濟的階級が現はれ、新き階級と共に新い階級心理が生じて來ると見なければならぬ。

そこでロスチヤイルド家が猶太であつてもなくても資本家階級に屬するとに違のない如く、三井三菱が士族であるか平民であるかは、階級闘爭を論ずる場合には閑却していゝこととなつたのである。舊は血族上の結合を、假に垂直に社會を分割していたものと見做せば、此垂直線にお構なしに、更に水平の一線を入れたものが、即ち近世の資本對勞働の階級であつて、勞働者の中からは、絕えず此水平線上に浮出づる者があり、資本家の中からは、絕えず水平線下に沈みゆく者があつても、夫は資本勞働の階級的對立てふ事實を弱めないのである。血の結合は人に屬する。人に從て動いてゆく。近世の經濟的、社會的階級は、人に屬せずして制度の裡にある。其人の血液ではなくして、偶々其人が生產組織の如何なる位置に身を措くかといふことである。

であるから此意味での階級は、一社會の經濟組織が分裂と矛盾とを含で來た瞬間から、血液や同情や理解や個人個人の心理から無關係に成立して居るのである。言換て見れば、生產力と生產機關との分裂、生產機關が生產者の手から離れて非生產者の占有に歸して居る經濟組織の確立と同時に、近世的の所謂經濟的階級、社會的階級は自づからに其處に成立するのである。即ち近世的の意味に於ての階級闘爭の原因となる可き階級、社會主義の土壤となる可き階級なるものは、現代社會の經濟的構造に內在するものであつて、之を血族關係による族籍などの裡に覓めるのは少々年代違である。

此意味に於ての社會的階級が、日本には無いか何う乎。之を言換えれば、日本には歐羅巴と同じ原則の上に立つ經濟組織は存在してないか、何うかと云ふことになる。

三

華山君はその所謂新勞働問題の提出たる『相霑ほす心』の中で之に答へられて居る。華山君は極て損抑的の態度

を以て、日本の現在が『或る意味からいへば産業界の過渡時代に在るものと見るも差支なからう』と思はれている。或意味でなくとも、如何なる意味からでも日本は現に産業上の變形を經つゝありと云つて差支ない。けれ共華山君に從へば、それは歐洲人の社會の經過した所謂産業革命ではないのである。資本主義的經濟組織の確立と、近世的無産者階級の出現と、之に伴隨する階級鬪爭とは皆産業革命から出發する。日本の社會が此同じ産業革命を經たといふことは、若くは經つゝありと云ふことは、同時にそれと同一の結果の豫想となるものであつて、思ふに華山君の鬼門であらう。

歐羅巴に於ける産業革命は大機械の應用に始まつて、手工制の壓倒、大工場制の勃興に伴ふ生産者と生産機關との必然の分離である。生産機關の所有者にして非生産者たる資本家と、生産者にして生産機關から驅逐せられたる無産勞働者の對立である。華山君の所謂産業革命ならざる或る産業界の變革が、日本の社會生活に現に與へつゝある影響と、歐洲人の社會が産業革命から與へられたる結果とを比較して、果して何れ丈けの相違があるか。

華山君は『歐洲の進化した産業、即ち機械の發達とか科學的精神とかいふものは我々の産業の材料として滋味として學ぶ可きである、然しながら歐洲人の物質的外面的、産業精神をとり入れる必要はない』と云はれている。言葉を換て云へば産業組織は學ぶ可し、産業精神は容る可らずである。歐洲人の産業精神が、その産業組織と離る可らざる關係があり、産業組織その物の中から醸成せられたものであると云ふやうなことは、華山君の恐く想像だもせられぬ所であらう。

歐洲人の産業精神とは、華山君の所謂『掠奪根性』『泥棒根性』『物を基本とする鬪爭』である。階級鬪爭である。そこで華山氏の要求を重譯して見ると歐洲人の生産技術は學ぶ可し、階級鬪爭は學ぶ可らずである。けれ共歐洲人の社會にある資本勞働の對立は、生産技術の進歩の必然の結果として現れたものである。歐洲人の進歩した生産技術を受容れることは、取も直さず産業革命であり、資本家階級と勞働者階級との分裂、對立である。進歩した科學と生産技術を取て、掠奪的産業精神を絶滅すべしとは、それは社會主義共産主義の云ふことである。華山君は社會主義者共産主義者であらうか。

四

『歐洲では掠奪階級と被掠奪階級が常に相爭鬪している』ことは、華山君の言葉の通りである。けれ共掠奪制度は必しも『掠奪根性』と『泥棒根性』とを前提とするものではない。勞働者が賃銀として受くる以上の價値を生産し、而して此剩餘の價値が生産者以外の收得に歸するといふ事實に依て掠奪制度は成立つものであつて、必ずしも個人的に掠奪根性、泥棒根性の有無を吟味するの必要はないのである。個人の意圖、個人の根性を放れて其所に必然に自働的に掠奪が行はれる、之が近世掠奪制度の特長であつて、勞働爭議が個人的から階級的となり、人身的から社會的となつたのは之が爲である。

そこで『溫情主義』なるものゝ價値が明かになつて來る。所謂溫情主義なるものが、若し誠實に凡ての資本家に採用せられる時があつたなら、吾々は華山君の後から、其社會の產業心理なるものが、少く共自覺の範圍に於ては掠奪根性でない事を認めるであらう。けれ共尚それは其所に掠奪制度がないといふ證據とはならぬのである。何故ならば溫情主義の下にも掠奪制度——恐くは掠奪制度の最惡なるものが成立ち得るからである。溫情主義を以て掠奪制度の反證とする爲には、華山君は先づ、溫情主義が決してエフイシエンシーの一種、而かも巧妙婉曲なる一種でないことを立證し、而して溫情主義の實行者が、勞働者の購買と消費から一錢の利潤をも收得していないといふ事實を證明するの責任がある。

從て階級があるといふことと、階級の自覺のあるといふこととは必しも同一でない。階級的自覺がないとか、明白でないとか、要求がないと云ふ丈で直に共所に階級なしと速斷するは間違つている。けれ共明白な階級的自覺はなく共、苟も階級のある所には、必ず何等かの形で階級の鬪爭が始まる。突發的に起る罷工の如きはそれであつて、日本の罷工が突發的であり、感情的であり、無組織的であるからとて、歐洲の夫と根本から違ふと思ふは大なる皮相の觀である。歐洲勞働者の階級的自覺を最も明白に代表しているといふ總同盟罷工の思想にしても、突發的、感情的、一揆的の散漫な罷工運動の裡から生れたものである。日本の勞働者に階級的の自覺と要求とがないと云ふ點から階級の存在を否定せられるには、少く共是等の突發的の勞働爭議が、全く階級——吾々の云ふ意味での階級と云ふことに無關係に說明され得ることを證明して掛らなければならぬ。

資本勞働兩階級の明白なる對立がない、從て決勝的の鬪爭がないと云ふことは、其社會が尚ほ產業組織の革命を完了して居ない證據と見る可きものであつて、偶々階級心理、階級心理が產業組織の變遷に伴ふて變遷するといふ事實を證明するものである。之を見て直に其社會に階級なし、階級の爭鬪なしと思ふのは、社會を平面にのみ觀る人のことで、餘に歷史を無視した話である。西洋を辨することは、華山君の云はるゝ如く六ヶ敷いこととは云いながら、今日の歐羅巴が資本勞働兩階級の自覺した明白な對立であるからとて千百年來かく固定してあつたと解する程に、しかく歐羅巴を知ることに抑損的であらねばならぬ筈はない。近世產業組織の變遷と、之に必然に伴隨した近世無產者階級の出現と發達と位は知つたところで、甚しい傲慢には當るまいと思ふ。

五

歷史の上に私有財產といふものが現れて以來、原始社會が征服者と被征服者とに分裂して以來、如何なる所、如何なる時にも、如何なる形かで勞働者の階級の無かつたことはない。けれ共近世的勞働者が、凡ての時代の同僚と違つている點は、それが明白なる階級的の自覺に進で行くといふ一事である近世的の生產技術を應用する近世的の產業組織がある、近世的の勞働者、無

産者のある處、種々の事情からして、必ずや明白なる階級の自覺に到達すると信ずるが合理であり自然である。而して日本の場合では、歐洲との思想の交通といふことが、種々なる事情の中の重大な一ッであることは爭はれぬ。よし歐洲の勞働運動の思想に觸れたことが、日本の勞働階級の自覺の機緣となつたとて、華山君は矢張り之をもジヤパニンダである模倣的自覺である、日本に階級なし階級鬪爭なしと濟まされるであらうか。

　要するに華山君の新勞働問題とは、歐羅巴人の資本主義的經濟組織を取てそれに必然に伴隨する産業心理——階級鬪爭を避けるのである。而して之に代ゆるに日本人特有の勞働心理なるを以てするのである。然らば日本人特有の勞働心理とは何物かと云へば、華山君は溫情主義であると答へられた時、吾々は佛前のオボロ饅頭の、徒らに大にして餡の輕少に失望する。

　溫情主義といふと主從關係の美風といふと何れが易きやである。裸體の儘でも美風として通つている主從關係に今更溫情主義の改良服を着せるには當らない。日本の資本家と勞働者との間に、どれ丈通婚が行はれて、階級的の利害を重量に於て勝つているか、斯な白々しい問題は暫く棄てゝもいゝが、華山君が、階級の間に通婚が行はれているから理解と同情がある、從て日本人は資本家や上流社會に謀叛するの必要がないと云はれた時、日本人の階級的無理解と、町人閥の心理が遺憾なく陳列せられてゐるではないか。

　歐羅巴と日本とは違ふ、然り、それは西洋西瓜と日本西瓜の違ふが如く違つてゐる。けれ共赤い日本西瓜と桃色の西洋西瓜とが共に西瓜たる所に意義がある。『日本の歷史、日本の生活、日本の人間は毫も歐洲と相干涉する處がない』、その沒交涉な日本人と歐洲人とが、同じ歷史を書いてゐるのだ。

　侍と町人との階級鬪爭から明治のキヤピタリズムが生れた如く、『新日本創造が』若しありとしたならば、それは新しい階級の鬪爭からでなければならぬ。鬪爭の中に諸般の超脫があり、新生活の創造がある。

■新雜誌二三　　義英

　堺利彦氏は雜誌『新社會』を發刊した。氏の主張や思想は本誌讀者の知る所であり、又『新社會』も大抵併せ讀まれることであらう。氏は云ふ『さり乍ら、敵の大軍が此の退いて守る山寨も『敵の大軍が押しよせて來たら『是非に及ばず、いさぎよく一戰を試るつもり』であると宣言してゐる。更に『來つて此の山寨に投』ずるものは『戰術の相違、軍略の差異は今深く爭ひだてをする必要はない』と云ふ。而して『大同に從つて相共に謀』る點に於て吾々も大きな同なじサークルであらう。

　『科學と文藝』と云ふ雜誌が、加藤一夫氏編輯の下に發刊された。科學と文藝と云ふ問題は既に何とかその間に關聯した研究をされねばならなかつたのだ。此の標題は確かに時を得てゐる。所が初號の故でもあらうが、標題に對して讀者を裏切ること甚だしい。科學と文藝と云ひ條、單に科學の話と小說とを別々に置くのでは意味があるまい。科學者のみたる文藝、文學者のみたる科學、科學的文學觀藝術的科學觀、などが旺んに論議せられずば終に此の雜誌も標題負けに終るであらう。

　『反響』も復刊され『創造』『エゴ』も復活した。『反響』は風俗壞亂と云ふので發賣禁止。

平民經濟學（一）

大杉榮

近代機械制度

一　現代社會の經濟的三特徴

今日の社會は、經濟學上、次の根本的三形式を以て、其の特徴とする。

一、社會的生産と分配とが、雇主即ち個人によつて經營されてゐる事。
二、各工業内の企業と經營とが雜多に行はれてゐる事。
三、社會的原料が私有財産に歸してゐる事。

第一の生産と分配とが雇主によつて經營されてゐると云ふのは、少數の個人即ち雇主階級が、勞働者をのけものにして、自分だけで、生産と分配との經營に必要な次の如き一切の經濟的權力を握つてゐる事實を指す。

一、勞働者と使用人との勞働時間をきめる權力。
二、賃銀と報酬との額をきめる權力。
三、勞働者が事故又は疾病等の爲めに、一時勞働の出來ない場合に、其の賃銀をとり上げて了ふ權力。
四、社會的分配の中の自分の分前を、地代、家賃、利子利得、及び配當等の名義の下に、先取する權力。

此等の權力は勞働と同時に消費の量をも決定する事になるので、行政的と云ふよりは寧ろ經濟的範圍に屬するものである。然るに雇主は、猶次の如き、行政的權力をも握つてゐる。

一、其の勞働者と使用人とを雇入れ又は解雇する權力。
二、其の企業の一切の技術的條件、殊に其の機械の使用方法をきめる權力。
三、商品の價格をきめる權力。
四、生産に用ひる原料を管理する權力。

次に第二の企業と經營とが雜多に行はれてゐると云ふのは、各工業に幾多の同樣の會社や工場があつて、其の間に豫め何等の合意もなくして、生産が行はれてゐる事實を指す。此の企業や經營の雜多な事は、其等の會社や工場に、常に損失の危險をつくつてゐる。

最後に第三の社會的原料の私有と云ふのは、生産と交換とに使用される一切の資本、即ち土地や、工業材料や、不動産や、又は貨幣等が、すべて少數の個人即ち雇主階級に所有されてゐる事實を指す。こゝに注意して置かなければならぬのは、第一の雇主的經營が、他の經濟的二形式、即ち企業の雜多と、原料の私有とを必然に附帶せしめる事である。

斯くして雇主階級即ち資本家階級は、經濟的及び特殊の司法的權力を握る一社會的團體を成し、此の權力によつて全く雇人階級即ち勞働者階級と區分される。

然らば今こゝに論ぜんとする近代機械制度とは、如何なる性質を有し、又前述の經濟的三形式によつて構成される今日の社會に對して、如何なる經濟的反動を呈するもので

あらうか。是れ即ち本論の主題である。

二 近代機械制度

此の機械制度即ち近代業工制度と云ふ名の下には、鐵道航海、冶金、鑛山、紡績、電氣工業及び化學工業等に使用される一切の機械が含まれる。此の機械制度は、從來の多くの職業を工業に代へて、次の如き新しき技術的及び經濟的必要を強ひ、又後に說く莫大なる利益を齎らす。

一、農作地及び都會地の自由使用。
二、特殊の建物、即ち工場や製造所の建築。
三、巨大なるしかも時々新しく造り換へなければならぬ機械、及び多量の原料。
四、多數の教育ある監督者。
五、各企業每に數百又は數千を以て數へる勞働者及び使用人。
六、勞働者の配布を屢々變更する事。
七、巨額の創業資本。

此等の必要は又、規律ある共同勞働、及び勞働者の極度の分業等の、未聞の勞働形式を強ひる。

そして此等の必要を十分に滿足させ得ない經濟的形式の社會に於ては、機械制度に其の十分な發達を遂げさせる事が出來ない。從つて其の齎すべき次の如き莫大なる利益を享ける事が出來ない。

一、無數の新しき可能性を實現する。例へば鐵道は旅客と貨物との運輸を容易にし、且つ迅速にした。此の交通の容易は社會生活を動搖せしめ、又工業上、科學上及び藝術上の近代世界主義を發生せしめた。瓦斯工業及び電氣工業は全く都市の面目を改めしめ、且つ甚だしく吾々の生活狀態を變ぜしめた。

二、著しく勞働の生產力を增加する。そして此の生產力は、生產物の增加と勞働の短縮と云ふ、二重の形式の下に現はれる。例へば今歐米の諸据置動力機械と汽車と汽船とを合せて五億萬馬力あまりある。一馬力を二十人の力に等しいとすると、此の五億萬馬力は五萬人の二十倍即ち百億萬人の力となる。

斯くして人類の物質的幸福は、技術的方面から見れば、單に人間の勞働と云ふ事を以て其の唯一の條件とするものでなく、更に機械の生產力に多大の負ふ所ある事が分つた。そして此の機械制度の發達と共に、若し雇主的經營と云ふ邪魔さへなければ、勞働者の勞働時間が益々短縮されなければならぬと共に、其の分配分前が益々增加されなければならぬ筈となつた。

三 機械制度の利益

猶此の機械制度には、其の生產力に伴ふべき、他の首要なる利益がある。即ち貧困の技術的、及び一時的原因を廢滅する。

一、貧困の技術的原因。

社會的生產は、土地と其の齎す原料、人間の勞働、及び機械力の三要素を必要とする。

近代機械制度の以前には、人間は土地と原料とを有し、又自らの勞働力を備へてゐた。しかし第三の要素たる機械が缺けてゐた。

風、瀑流、動物、及び手道具等は、兎も角も其の活動手段であつた。しかも猶此等の方法は莫大な勞力を費さしめ且つ其の齎す効果も極めて小さい。例へば麥粉を挽く事は最初は奴隷によつて、次に動物によつて、最後に水車や風車によつて行はれたが、猶著しく勞力を要せしめる。斯くの如き道具を以てしては、必然に農工生産は人間の慾望を充す事が出來ない。そして此の不十分は必然に又群集の貧困を決定する。

二、貧困の一時的原因。

これは風雨等の氣象的變動、流行病、及び戰爭によつて生ずる收穫の損亡を云ふ。此の原因の價値は專ら技術的方法の弱味に起因する。即ち諸國間の交通運輸の方法が緩漫であり、且つ困難であつた間は、適當な時間内に十分な商品を得る事が出來ないので、收穫の損亡は必ず大饑饉を起す。又戰爭は或る地方を荒らし、流行病は勞働を中止させる事があるので、何れも往々貧困の一時的原因となる。されば貧困の大危機の歴史は、常に惡作、流行病、又は戰爭の歴史と一致してゐる。

然るに近代工業制度は此の二つの原因を廢滅した。

近代社會は生産に必要な彼の三要素を具備してゐる。原料も勞力も機械も、技術的方面から見れば、既に有り餘る程である。餘儀なく失業してゐる幾十萬の勞働者は、歐米諸國の到處に勞力の需要を待つてゐる。又機械制度の發生以來、第三の要素たる機械は、技術的見地からすれば、消費の有らゆる欲望を滿足せしめ得る程に有力なる生産力を控へてゐる。

交通や運輸の容易は、如何なる不作に際しても、少なくとも歐米諸國には殆んど饑饉を惹起さしめる事がない。

斯くして近代機械制度は、始めて人類社會に、貧困を廢滅するの方法と、及び人類が甚だしく勞苦する事なくして有らゆる欲望を滿足するの方法とを與へた。始めて全人類の幸福を、更に奢侈をすらも、實現するの機會を與へた。即ち人類の生産能力は、若し今日の經濟組織が妨げさへしなければ、其の消費能力を超えんとするまでに至つた。

されば全人類は、今や此の近代機械制度の發達によつて貧困の一時的及び技術的原因を廢滅して、全く新しき社會生活の出發點となるべき偉大なる力を得た譯である。そして此の點が吾々の最も注意すべき、一大事實であるのだ。

四　機械制度の反動

機械制度の發達が現代社會に與へる經濟的反動を研究すると、吾々は此の機械制度が現代社會の根本的三形式、即ち雇主的經營や私有財産制や及び企業の雜多と共存する事の出來ない事實を見る。即ち現代社會は、機械制度の利益を見棄てるか、若しくは其經濟的三形式を變へるかの、デイレンマに置かれる。次に其の反動を列擧し、更に後の諸章に於て一々それを詳述する。

一、雇主が社會的生産を經營する間、雇主は、勞働者が機械制度の生産力から得べき二重の利益、即ち勞働時間の短縮と消費の增加とを利用する事を妨げる。

二、雇主は生産費を減少し利得を增加する目的を以て、機械制度が齎らす利益と技術的必要とを、勞働者階級に對する其の專制主義を强める事に利用する。

三、雇主は、機械制度が齎らす利益を、企業と競爭の自由を增長さす事に利用する。そして此の競爭は、各工業の進行をして相互に連絡を缺かしめ、商業的恐慌を起し、從つて勞働者の地位を不安ならしめる。

四、機械制度は、種々なる技術的必要、即ち農業地と都會地との自由使用や又は多額の創業資本等を强ひる。然るに經驗は此等の技術的必要と現代社會の經濟的形式との全く調和す可らざる事を敎へる。私有財産制と雇主的經營とは土地を自由に使用する事を妨げ、從つて機械制度の廣く且つ深く利用される事を妨げる。

五、機械制度と經濟的形式との不調和は、遂に雇主階級をして株式會社を起さしめた。株式會社は企業に必要なる資本を蒐集する新方法であり、又社會的生産を管理する新方法である。そして此の不調和は又、更に雇主階級をしてトラストを設くるの餘儀なきに至らしめた。トラストは雇主階級の利益の爲めに、企業の雜多を廢滅せしめるものである。

そして此等の反動の中に現代社會崩壞の必然性が含まれてゐるのだ。

禁止物の配付

渡邊政太郎

赤羽君の遺物『農民の福音』を配布した事が發覺して、廿日午後三時突然家宅搜索をやられ、殘本二百十七册、他に三十三册の社會主義に關する書籍を押收されました。同時に富坂署に同行を求められ取調べを受けたが直ぐに歸宅しました。昨日また警視廳に召還されまして、種々取調べを受けた後、丸山高等課長と二時間許り議論をやりました。いろ〳〵と話はあつたが、要は諸君が主義を信ずるのは、宗敎家が宗敎を信ずるのと同樣に、勿論自由である、が、その實現の方策に於て國家の法律を無視してやつて貰ふと、國家から委託されてやつてゐる僕等にとつて見ると、ドウしても默視することは出來ぬ。ダカラ諸君が過激な、突飛な行爲に出れば、勢ひ玆に敵味方の氣勢を以て互に腕をまくらねばならなくなる。ダガ夫れでは互に不利益だと思ふ。僕は諸君の主義に絕對に反對はせぬ。確かに何時かは實現するものらしく思ふ。ダガそれには長い時間と人間の多大の努力を要すると思ふ。殊に日本の國民性は未だ歐洲のそれと異つて、折角諸君の配布した物を官廳に鼻高々と持ち込む者があるやうだから、氣長くかゝつて土臺から造り上げるやうにせなければ折角の骨折が却て効を奏さない事になりはせぬかと思ふ。などゝ甚だ有難い、しかし實はさき樣に御都合の好い、理窟をウンと說法された後ち、今回の事件は一時僕の手に保留して置くからその心算で今日は歸つて呉れと云ふ事で放還されました。—九月廿三日—

復活號

榮

■本年三月、創刊以來六ケ月間の殆んど連續した發賣禁止の爲めに、遂に『平民新聞』を廢刊してから丁度半年になつた。そして其際讀者諸君に御約束した再擧の企てが漸く今こゝに實現された。しかし此の再擧は、順序から云へば『平民新聞』の復活であるが、名義は更に其の以前の『近代思想』にまで立戻つた。そして內容は、丁度『平民新聞』と『近代思想』との合の子となり、稍々前者の方が勝味を帶びる事になつた。

■此の復活號が生まれるのにも、いつもと同樣に、隨分難產に苦しんだ。問題は、矢張りいつもと同樣の、金の問題であつた。此の金の事に就いては、讀者諸君にお詫をして置かなければならぬが、實は『平民新聞』の保證金も、新聞の損失から生じた借金を埋める爲めに、全部費つて了つたので、又新に保證金をつくらなければならなくなつた。これには大ぶ骨も折れたが、そして其のために發行日も豫定から少々延びる事になつたが、しかし數名の友人からの同情ある借金で、兎も角も出來た。

■今後も亦、矢張りいつもと同樣の、經營難に苦しむ事と思ふ。これには只だ讀者諸君の御助力による外はない。そして其の御助力の方法としては、何よりも先づ、本誌の購讀者を殖やして戴く事である。『平民新聞』の讀者諸君には此の『近代思想』を送る。引續いて御購讀の方は前金を送つて戴きたい。

■編輯の方も、一番の働き手の寒村が、折惡しく本月の始めから或る雜誌へ日傭に出かけて、殆んど寸暇もなく、僕も借金や移轉や印刷所の事などで毎日のやうに駈け廻つて、愚圖愚圖してゐるうちに二十日を過ぎても少しも手をつける事が出來なかつた。そして漸く二十五日と六日との二日間で、むりやりに書き上げこね上げて了つた。しかし次號からは僕等にも多少の餘裕が出來ようし、もつと內容の豐富な、多樣な、そして整頓したものが出來るだらうと思ふ。

■猶僕等は、讀者諸君の總てに、此の編輯の方の御助力を願ふ。殊に地方の勞働者の狀況に就いての御報道を願ふ。新聞の切拔を送つて戴くだけでも有りがたい。そして次號からは、別に『僕等の生活』と題する數頁の一欄を設けて、諸君自身の若しくは諸君の見聞する生活の事實なり、又それに就いての諸君の感想なりの、寄書を盛りたい。此の分は、二十字五十行以內、〆切十五日。猶編輯上の御注意なり御注文なりも伺ひたい。

■次に『平民新聞』廢刊以來の、同志の消息に就いて、少しく御知らせしたい。僕は先づ、『平民新聞』の廢刊に次いで、横濱の同志中村勇次郎板谷漂藥の二君が『解放』と題する小雜誌を出した事を、特筆して置きたい。次には東京の吉川守邦君が『勞働者』を、大阪の若林謄造君が『烟』を、函館の久保田鬼平君が『足跡』を出した。何れも二三號で休刊若しくは廢刊したが、僕はこれ等の諸雜誌が、及びこれに類する諸雜誌が、再び彼地此地に現はれん事を望む。僕等の運動又は傳道は、斯くして各地方に、自治自發的に行はれなければならぬ。尤も此の中の『勞働者』は、近く『近代思想』の附錄として、再刊の企てがある。猶それ等の諸雜誌の外にも、『平民新聞』と同時頃若しくはそれ以前から發刊せられ、猶繼續せられてゐる、京都の上田蟻善君の『へいみん』、埼玉の臼倉甲子造君の『微光』、東京の西村陽吉君の『靑テーブル』、加藤時次郎君の『生活の力』なども、多少の色彩を帶びてゐる。

■寒村と僕とがやつてゐた平民講演會は、貸席の方を警察からの干涉でことわられたので、遂に小石川區水道町の舊水彩畫研究所を貸り切る事にした。そして其處を『平民俱樂部』と名づけて、宮嶋資夫君夫婦に住んで貰つた。これは隨分大きな家なので、何れは圖書館も設け、其他いろ〳〵と勞働者の俱樂部的組織をつくる考であつたのだが、これ亦家

主と地主からの苦情で、遂に移轉の止むなきに至つた。で、其近所に家を貸りて、其處に僕一家が住み、講演會も其處でやり、そして宮嶋君は『近代思想』の發行人として郡部の調布に移轉した。これで平民倶樂部の企ても當分思ひとまつた。奥付にある宮嶋信泰と云ふのは資夫君と同一人であり、麗子君と云ふのは同君の細君である。

■平民講演會は毎月一日、十五日の午後六時に開き、一日は寒村と僕とが講演し、十五日は茶話會にする。僕等の信用ある人の紹介があれば、どなたでも、そして成るべく多くの御來會を希望する。

■猶第卅八頁の渡邊君の通知にあるやうな事件が、東京の相坂佶、山鹿泰治の兩君によつて、大ぶ猛烈に行はれた。一週間と云ふもの二君は警察の嚴重な警戒の網をくゞつて東京及び附近の工場地に出沒して、數千部の『平民新聞』の殘りを配付した。そして遂に捕はれたが、結果は矢張り、渡邊君と同樣に直ぐに放還された。其他近來何處からか、秘密出版物らしいものが、ちよい／＼現はれる。斯う云ふ國法を破るやうな事は、甚だ怪しからぬ仕方だと、折々方々からお叱りを受ける。

■しかし此の秋からは、そんな怪しからぬ事も、全く無くなるか或は餘程減る事と思ふ。堺利彦君の方でも『新社會』を出す。僕等も此の雜誌を出す。從つて廣い意味での總ての社會主義者は、兎も角も其思想と感情との發表機關、又傳道と運動との機關を得た譯である。此の二つの雜誌さへ、お上が無事に出させれば、何を苦しんで同志があんな怪しからぬ仕方に出る筈があらう。お上は、渡邊君の通知にもある如く、同志の犯罪者に對して極めて寛大な處置を取り、何だか僕等を手にかけるのを憶劫がつてゐるやうに見られるが、それと同樣に新聞雜誌の方も努めて御寛大にされた方が、矢張りお互にとつての利益ではあるまいか。

■最後に一寸紹介をして置くが、山川均君と云ふのは、新しい人達には知られてゐないだらうが、僕等には先輩と云つてもいゝ、そして甞ては我黨の若き經濟學者として、又勇敢なる戰士として尊重されてゐた人だ。例の赤旗事件で入獄して、其後出獄してからは暫く郷里の岡山に沈默してゐたが、又再び僕等の運動の先頭に立つ事になつた。茅原華山に對するこんどの駁論は、あゝ云ふ途方もない愚論の出たのを利用して、僕等の方の階級論の極く初歩の説明の機會を捕へたものだ。

本誌事務所
東京市小石川區武嶋町二四
近代思想社
振替東京一七一六三

■定價一册金十錢、半年分前金五十五錢一年分前金一圓。但し外國は別に一册金二錢宛の郵税を要す。郵券代用は五厘切手に限る。但し一割增の事。
■廣告料特別一頁廿圓、普通十五圓。
■本社振替貯金番號東京一七一六三。

大正四年十月三日印刷納本
大正四年十月七日發行

府下調布町布田小嶋分一六七
發行人 宮嶋信泰
東京小石川區武嶋町廿四
編輯人 大杉榮
府下大久保百人町三〇七
印刷人 荒畑勝三
府下調布町布田小嶋分一六七
發行所 近代思想發行所
東京市神田區表神保町十
印刷所 第三帝國印刷所

大賣捌所 東京堂、上田屋、東海堂、北隆館

社會的文藝・實行的藝術

最も人間及社界生活に接したる……眞正の文藝は本叢書を措きて他に求むる能はず……

生活と藝術 叢書

每月二冊續刊

第一冊十月初旬發行

菊判截形百餘頁
装幀堅實美本
每冊寫眞版一葉
定價◎金參拾錢
送費一冊各四錢

第一編 社會的近代文藝 馬場孤蝶著

第二編 自由社會の男女關係 カアペンター著 堺利彦譯

第三編 隨筆 金魚のうろこ 上司小劍著

第四編 勞働運動の哲學 大杉榮著

「生活と藝術叢書」は古典復刻叢書にも非ず趣味叢書にも非ず十錢叢書にも非ずして、實に文藝と哲學とを一般社會に普及せしめ、接近せしめ、藝術と實生活とを渾一せしめ富者階級の手にある哲學藝術をして平民の手中に持ち來さんとするものなり。更に我々勞働階級の健全なる世界を建設せんとする基礎たり先驅たらんとするもの也。形小なりと雖篇々皆著者の心血を灑げるものにして、各著者の思想及藝術の精髓なり。價又廉にして購讀甚だ容易なり。

以下逐次續刊

發行所 東京市日本橋區檜物町九番地 東雲堂書店 電話本局一八一七 振替東京五六一四

■近代思潮叢書■

菊半截美本 二百五十頁 —— 定價各五十錢 —— 送料六錢

■木村荘太氏著■愈々發賣

第十一編

サンヂカリズムの研究

近く佛蘭西に社會に發して全歐洲に傳播せんとし、生氣なき社會改良主義に墮せんとするマルクス派社會主義に新生命を注入せんとする勞働運動の新形態、革命的サンヂカリズムとは何であるか、その實際的運動、主張、理論的根據に對する紹介を期して此本は書かれたものだ。かくて勞働者自らする勞働運動に對する同情を通して著者はサンヂカリストをしてサンヂカリズムを誇らしめた。蓋し今出づべくして出た本の一つである。

生田長江氏譯

第一編 ニイチェ超人の哲學

三版發賣

- 二編 ■惡魔主義の思想と文藝 岩野泡鳴
- 三編 ■個人主義思潮 相馬御風
- 四編 ■未來派立體派の藝術 木村荘八
- 五編 ■印象主義の思想と藝術 高村光太郎
- 六編 ■タゴール聖者の生活 吉田絃二郎
- 七編 ■ロマンロランの思想と藝術 內藤濯
- 八編 ■オイケンと現代思潮 稻毛詛風
- 九編 ■トルストイ人道主義 加藤一夫
- 十編 ■神秘主義者の思想と生活 吉江孤雁
- 十二編 ■虚無思想の研究 生田春月

東京市牛込區西五軒町三五 天弦堂書房 振替口座東京二九五五九番

故幸德秋水遺著

基督抹殺論

一代の論客幸德秋水が、大逆の罪に坐して斷頭臺上の露と消ゆるに當り、所謂『生前の遺稿、最後の文章として、大膽基督を抹殺し去る。寔に宗教史上の大發見にして、破天荒の奇書也。▲定價金七十錢▲郵稅金八錢

堺利彦先生著譯

社會主義倫理學

獨逸社會黨首領カウツキーの『倫理と唯物史觀』を譯す。是れ堺先生の譯文に非ず、實に先生一代の心血傾注也、奔瀉也▲定價金一圓▲郵稅金八錢

賣文集

論文、小說、隨筆、短評等、十數篇を收む。ショウの脚本『ヰドウス・ハウセス』の譯も、此中に在り。▲定價金一圓▲郵稅金八錢

樂天囚人

二年間獄中生活の卒直なる實寫文也、改革者の眞摯なる告白文也。別に附錄として小說『白頭の戀』あり。▲定價金六十錢▲郵稅金八錢

赤裸の人

佛蘭西革命の思想たの點火者ルソウが懺悔なり、自傳なり、奇態矯激卒直矛盾を極む▲定價金一圓▲郵稅金八錢

人と超人

ショウの最大脚本、彼の哲學、人生觀、兩性觀、滑稽皮肉、冷嘲熱罵、悉く集めて此の一篇に在り。▲定價金九十錢▲郵稅金八錢

發行所 東京市小石川區原町六 振替東京一五六八六番 丙午出版社

近代思想
第三巻第一號
大正四年十月四日第三種郵便物認可　大正四年十月七日發行
大正四年十月二日印刷納本　毎月一回一日發行
十月號　金拾錢